
光と闇

緋翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と闇

【Zコード】

Z5799U

【作者名】

緋翠

【あらすじ】

頭脳明晰、運動神経抜群で顔も性格も良いと言われる幼馴染が異世界で勇者に。

ごり押しして船に乗つたら嵐に巻き込まれ、何故か聖女様に海へ突き落されました。

以後異世界観光しつつ、のんびりと元の世界へ帰る方法を探す勇者の幼馴染の話。

段々主人公が最強ちっくになつていきます。

勝手ながら、今まで連載していた「光と影」「光と闇」を削除

し、新たに投稿させて頂きました。

諦めだけは特技に近い所為で彼女は今この状況にももう慣れていた。しかし幼馴染と一緒に居ても飽きないと思つてしまつた自分を無償に殴りたくなつた。

普段幼馴染と帰る事はない。

こちらが徒歩で学校に行くのに対し、向こうは自転車で通学、という理由もある。

幼馴染と言つても、お互いの両親が仲が良いだとか、そういうので小学生の時まで家族ぐるみでよく遊んでいただけだ。中学生になつてからはお互い喋る回数も減つていつた。

幼馴染とはいえ所詮は思春期盛りの子どもだ。

高校三年生ともなればめつきり話す機会はなくなつた。だがそれは学校での話で、意外にも学校から帰れば普通に話し出す。そしてたまには共に帰る仲だつた。

段々自分が幼馴染のトラブルに巻き込まれてきたと実感してきたのは小学校高学年辺りだつた。

そしてそれが嫌がられ、その他諸々よくありそうな感じのトラブルだと知るのは中学に上がつてからだ。

ネット環境が揃つ事になつた自分は嬉しくて仕方なくて日々ネットサーフィン。

そこで知つたのは、どこか親近感が沸くもので。

しばらく経つた後に「あれ、これ私とアレ（幼馴染）じゃ…？」と気付きます。

幼馴染がイケメンで頭やら運動神経も良いと来れば、後は王道的展開である。

小学校高学年辺りからモテ始めた彼は誰とも付き合つでもなく、だ

が女の子達との親密な交流も忘れない。

こいつはガキの頃からハーレムを作るような人物であった。

ミーハーかなんかだろうと思われる人物もいたが、それ以上に幼馴染自身が一人一人と向き合っていたのが原因だと思われる。

しかし一見では優男のような、いつでも柔らかな笑みを浮かべているが、性格はなんともいい難い。

時にはこちらが火の粉が降りかかるうが、ヤツは高みの見物と言わんばかりに裏で愉しんでいる人間なのだ。

反対に、怪我を負わんばかりの被害が私に降りかかりそうになればヤツは止めに入ってくる。

隨分と長い幼馴染の紹介ではあつたが、平穩な私の学生生活を脅かしてくれたのはこいつが原因だ。

今回は隨分とまたでかい面倒事をぶら下げる、いらんテンプレも付けてくれるとか、異世界に強制連行されるとかそういう特典は迷惑なんで、本当にいらないです。

「待て玲、お前だけ逃れるつもりか！裏切り者め！」

「何が裏切り者よ。その、変な幾何学模様に大人しく吸い込まれて野垂れ死になさいっ！」

教室の扉を必死になつて掴む玲は今、幾何学模様に吸い込まれかけている幼馴染に捕まっていた。

男女の差ではあるが人間危機が迫ればそれなりに力も出る。所謂火事場の馬鹿力。

しかし同じく危機に瀕する幼馴染もまた、馬鹿力を発揮していた。およそ玲の倍の馬鹿力ではあつたが、徐々に自分の足半分が沈んだ時、遂に玲の手が扉から離れた。

「ひうなつたら道連れにしてやるぞ、我が幼馴染よ……！」

「ここで厨一発言する君はどうやら余裕らしいわね。私の事は気にしないで、一人旅でも楽しんでらっしゃい」

とは言つが、実際扉から手が離れた時点で玲は諦めていた。
そしてこの台詞がこの世で最後の台詞となり、彼ら2人の声を聞いた者はいなかつた。

私達はどうやら異世界に迷い込んだらしい。

らしいというのも、もしかしたらこれは何処かの宗教団体がこいつを崇めたてようとして誘拐したのかもしれないからだ。

そして私は口封じの為に殺されそうだ。
ほんつと面倒だわ、この幼馴染。

目の前には濃紺の裾が足首まであるマント、というよりローブを着た人達が五人いた。

その中で一際目立つ服を着た人が指輪を一哉君（幼馴染の名前）の指に付けると、一步下がつて何かを言った。

指輪の効果なのだろうか、一哉君が何を言われたのか分からなかつたが（英語じゃなかつた）彼は一つ返事で何かを受けたみたいだ。

きつとよつこそいらつしゃいました勇者様、だつたら引き受けた一哉君アホなんじやないの。

その部屋は広く内装が凝られていた。

調度品といった物は無かつたが、足元に目を見遣ると床にあの幾何学模様がかすかに残つていた。興味本位ですつとなぞつてみると、触れた箇所だけが光を帯びる。

慌てて手を引つ込めればすぐに元に戻つたけど……あーびつくりした。

タイミング良く立ち上ると幼馴染が通訳してくれた。

「部屋に案内してくれるみたいだぜ」

「……急な出来事ね」

「大丈夫、害は無いよ。俺と玲が勇者な限り」「は？」

勇者？え、何これ……やつぱりテンプレ的展開なの？しかし何よりの通訳（という名の幼馴染）がないと困る私は、さつさと例の代表者と共に先を行く幼馴染の後ろを付いていく事にした。

幼馴染と仲が良さそうに話すのは、先程の代表者だ。

テンプレだと巫女、かな。

その女性はたまに頬を赤く染めながら幼馴染と会話していく。

無論、何を喋っているのかなんて私には聞こえない。

だけど分かる、私には分かるわ…… あの女性は幼馴染に落とされたと。

とうあえず自分の目的は異世界の言語と文字の習得になりそつだと思いながら、目の前で幼馴染にやられたこの女性が、私に被害をもたらすことがないよう祈るだけだ。

恭しくお辞儀をして出て行つた侍女のような綺麗な人たちが何かを言つて出て行くと、しんと静かになる。

はあ、という溜め息を吐いた彼女は倒れ込むように豪奢なベッドに寝転がる。

ふかふかのベッドに優しく包まれると、すぐに寝てしまいそうだ。しかし、元の世界に戻れるのか？と思考を巡らせ始めれば、意識がはっきりとしてくる。

ああ本当にファンタジーなんだなーとか、此処何処だらつ？と考えもあつたけど、何より自分が異世界にいるという認識を不思議に思つた。

どうして異世界にいると分かるのだろう？よくある小説みたいな展

開で幼馴染に巻き込まれて尚且つ魔方陣を見て、言葉が分からなかつたからだろうか。

なんか「ひ…」最初から分かっていました、と言い切れぢやいそなうな感覚。

でも食べ物は美味しかつたし、帰れなかつたら勝手に探せば良いだけだものね。

そういうばなんで召喚されたんだろ。

いや完全に私のは巻き込まれただけなんだろ「けど」
魔王の軍勢が襲い掛かってきそつだから、ここは勇者を召喚するしかないと踏んで、あの幼馴染を召喚したのかな。

それじゃあ、私が規格外の行動をすれば監視でも付けてくるのかな。
あー……それはちょっと勘弁願いたいわ。

よし、目先の目標としては此処の世界の事なんて知らないから、とりあえず幼馴染と自分の安全の確保。

……というかあの幼馴染の様子なら、安全の確保なんて自分だけで良いんじやないかと思えてきた。

「うん、寝よ」

翌朝。

起こしにやつてきた侍女（みたいな人）にやつぱり何を言われたのか理解できなかつたが、服を着替えさせて扉を開けられた所、外へ出ると言う事だつ。

勇者が召喚されたと云う事は王様に会うのか。
とりあえず翻訳者がいないと私は何もできない。

謁見の間に到着する前に幼馴染と半日振りの再会をした。

「おはよひ、玲」

「おはよひ」

「これから王様と謁見の間で会つんだつてさ。緊張するよなー」

「へー」

幼馴染が何か言葉を返そつとした時、幼馴染が後ろから声を掛けられて会話が中途半端に終わる。

侍女が何やら恨めしそうな、憎悪が籠もつた目でこちらを見てきた
けどいつもの事だつた。

ただ自分は無関係だと、空氣のようにしていれば良いのだから。
謁見の間への扉が重々しく開いた。

あの後謁見で何を言つてゐるのか分からぬからスルーしていたら、

金魚のフン扱いされた。

酷くね？元はといえば幼馴染が私を巻き込んでくれた所為なんだけ
ど。

「倉庫に行つて好きなものを持つていいって良い」という幼馴染の口
からその言葉を聞いた時、売りさばけば良いのにと思つた。

…… そうだ、選ぶなら地味なものを選ぶとしよう。
そしたら帰る方法を探しながら観光しよう。

昨日私達を召喚した女性は聖女と言われる人らしく、父親が先程謁見した人らしい。

幼馴染に落とされた聖女様は嬉しそうに幼馴染の横を歩いて私に牽制のようなものを仕掛けてる。

それに気付きながらも放置する幼馴染はやはり黒い。
今の所害がないから放置しているのだ、こいつは。

対してこちらはそのような牽制など慣れたもので……なんか段々この長い回廊に飽きてきた。

聖女様が何か言えば、どでかい豪奢な扉がそこにあった。

こちらに来る前に見たような幾何学模様の魔方陣とは別のが扉の前で現れると静かに開いていく。

中には目を瞑りたい程明るく灯された武器庫のような場所だった。勝手なイメージではあるが、無造作に置かれているかと思つていたけど、剣や盾は壁に乱れなく立て掛けられていたり、手が触れる範囲内に横に置かれたりしている。

灯りに反射する程綺麗に磨き上げられている武器の中に、装飾品もあった。

宝石店のようにショーケースに入れられている訳でなく、埃など知らぬかのようにとても綺麗だ。

きっと手入れをきちんとやつているんだろうな、結構大事にする人達なのね。

ぐるりと視界を巡らせていくと、金属などがあるこの空間の中に五、六cm程の厚さもある深紅の本が置いてあるに気付いた。

意匠に凝つたような装丁だが、タイトルが何処にも書かれてない本に段々惹かれていく。

本に触れたらきっと精神世界へと連れ去られて契約するまで抜け出

せないのかな、と頭で考えていたが、やっぱ人間てのは欲求には勝てないわよ。

「あ、」

一瞬の内に風景が変わる。
ぐにやりと曲がった感覚がして、軽く酔つた玲は立ち眩みのよつこ足取りが覚束なかつた。

しかしそんな今の彼女の目に映つた風景はどうか趣のある場所だつた。

たくさんの本が積み上げられた本のタイトルを見ていく内に、玲はハツとして気付く。

「！」の本読んだ事がある……？

何千という本の中には絵本や文庫本など、これまで玲が読んだ本がずらりと積み上げられていた。

懐かしい感覚になつてきただ玲は、他にもないかと辺りを探り始める。ふと視界に入った見覚えのある本を手にしようとした時、ぶわっと光が溢れる。

余りに突然な出来事に驚いた玲は尻餅をついてしまつた。
痛みにうろたえていると、長い黒髪をさらりと流しながら青年が恭しくお辞儀をしてきた。

「『』帰還なされた事を心より嬉しく思います、ディレンタ様」

「……は？」

「どうこう事だ。

と「いかディレンタつて何。

私にはちゃんと名前があるんだけれど。

「ディレンタ様？もしかして記憶が……」

「『めんなさい、私にはきつちり十八年間の記憶があるわ』

「しかしこの中に入つてくるにはディレンタ様のみあり得ないはず」

とは言われても、こんな美青年見たの初めて。

艶のある黒髪を後ろで束ね、異国の衣装を身に着けるもそれは彼に着る事を許されたかのようで、とても似合っている。

髪と同じ色の瞳が困惑したように開かれる。

こんだけ美人なら一発で覚えられそうだけど。

「とりあえず、名前名乗つたらここから出して頂戴」

「えつ？もう行かれてしまふのですか！？あなたと二千年振りの再会なのですから少しほは

ええい黙れ！！

強引に出て来た所為なのか、肉体へと戻つてきたら体がふらついてしまつた。

一哉君に支えてもらつたおかげで怪我もなかつたが、あの女性の視線は痛かつた。

彼はもう既に選び終わつていたが、何故か一個しかもらえない筈なのにガントレットも貰つていた。

何だと。

勇者様だから? 酷くね。

武器は白光に輝く剣らしく、寧ろ白光とこより、ガラスのよう透明で向こう側が透けて見える。

それが光に当てられて輝いて見えるけど、どいか腹黒い彼には性に合わない気がしてきた。

けど幼馴染が選んだものだし、口出しもしない。

そうそう、タイトルに書かれている『フェルマーの書』という文字は誰も読めないらしい。

あの聖女様でも読めなかつた。

フェルマーっていうのはさつきの黒髪の美青年の事だ。

そして物凄い展開があつた。

なんとこの国の言語、がいきなり理解できるよつになつたのだ!

フェルマー曰く、この世界の何らかの力、つまり魔力が宿つた物に触れれば理解できるらしい。

じゃあ何で私にあの指輪をくれなかつた。

『従者扱いされたからではないでしょうか?』

こいつさつきの事恨んでるわ。
口調が柔らかくない。

「では、早速魔力値の測定へと参りましょう、カズヤ様」

ああはいはい、私は無視ですか。
女の嫉妬なんぞに付き合つてられつかという心情にフェルマーが同情してきた。

余計なお世話だつた。

「玲、行こうぜ。次は魔力と属性の測定だつてさー。」

さつき聞いた、と返したが聖女様の御声とやらでそれは搔き消えた。
そういうえばさつきフェルマーに言われた単語が気になつて仕方ない。
測定を行う場所まで向かう間にフェルマーに聞く事にした。

『さつきの私がディレンタって、どういう事かしら?』

『記憶が欠落していらっしゃるならば、もしかすると御主人はディレンタ様の因子を継いだ存在なのかもしません』

異世界出身なんですが、と言いたくなるのを抑えて疑問に思つていた事を聞く。

『その、ディレンタの因子を継いでいたら何か起こるのかしら?』
『属性は闇でしょうね。魔力も神と言われても可笑しくないほど保有しています。この量は人間だと死んでしまいますから』

いつの間にか人外になりました。

母よ、父よ。

私が一体何をしたというのでしょうか。

『やはりあなたはティレンタ様なのです』

違う、私は影宮玲よ。

愛すべき母と父の子だ。

ティレンタなんて知らない。

私はそんな存在じゃない。

「では、これから魔力と属性の測定を行います」

「これはどうすれば良いんだ？」

「はい、手でこの魔珠に触れて頂くだけでよろしいですわ」

「へえ……」

魔珠と呼ばれた球体は透明な水晶体のようだった。

一哉君が魔珠に触れた瞬間、一気に輝きが増す。

辺りを飲み込む程に輝く柔らかな白い光に周囲にいる人達が呆然と見つめた。

「素晴らしいですわカズヤ様！光の属性だけでなく、基本属性もその身に宿す貴方はやはり勇者の素質があるのでしき」

「ありがとう、レニア」

あれ、初めて聖女様の名前を聞いた気がするんだけど…… そうだよね、自己紹介すらされなかつたし。

それって人間として失礼だと思つんだけど、高貴な方は何考えてんのかワカンネ。

「ほら、玲もやってもらえよ」

正直言つて、闇だってバレて迫害されるの嫌なんだよね。

勝手に召喚した拳句、何でそんな事されなきやいけないのよ?って話になるじゃない。

何その理不尽な話。

巻き込まれて来たんだから、私だけ帰してくれないの? まー今帰しちゃつたら幼馴染くんにも帰られて困るだらつて、仕方ないよねえ。

『幻術などもお使えになられます』

『ふうん……? それはいい事を聞いた。』

世界の情勢が分からぬ今、闇属性なんて怪しさ満載のこれをヒツにしておくれのは悪い事ではないと言えるだろう。

『フェルマー、私の属性を火にしなさい』

『生物の属性を変える事は出来ないのを承知で?』

『お前は黙つて幻術を使い、私の魔力の偽装と属性を火に変えない』

『な、なんて傍若無人っぷり……』

フェルマーとの会話をしながらも、水晶に手を翳す。文句は言いながらも、フェルマーって本当に良い奴。おっと、赤く煌々とゆらめく炎に思わず口角が上がってしまうのを抑えなくては。

『まあ! これほどまでの炎を……でもカズヤ様の方が魔力は上のようだ』『じりますわね』

当たり前でしょう、ウチのフェルマーが本来の魔力を偽装している

んですから。

という心の声なんて聖女様は全く知らないのに、彼女は自分のように鼻を高くしていた。

あの後ぐつたりした様子の幼馴染くんを見た聖女様は、もう夜も近いと言つて彼の背中を支えながら豪華な部屋から出て行つた。出て行く際、嘲笑つていたのを私は見ていなかつたけど知つているんだぞ。

侍女さんに頼もうと思つたんだけど、面倒だからフェルマーに任せて部屋に戻つた。

本つ当失礼な人間だよねーあの聖女様。

早速部屋に入つてやつた事といえば、フェルマーに頼んで幻術で偽装工作。

よく小説とかである監視とか本当にやられたら氣色悪くて嫌だし。

『さてフェルマー、此処はなんていう国か分かる?』

『此処はヘーネ教団総本山であるヘルラント。まあ国じやないです』

『中立国?いや、自治区かしら?しかしあ教団が此処まで資金があるとは……』

『この大陸は資源が豊富ですから』

フェルマーの話曰く、資源が豊富なだけでなく國同士の諍いが全く無く、この教団は大陸一でかい國とそれなりにパイプもあるらしい。

『君はあんな所いたにもかかわらず今の世界情勢を知つているというのか』

『私が知らない事があると思つてゐるのですか、御主人』

……」いつ、自分が知つてないと気が済まない性格じやだらうか。
とりあえず知識があつて困る事はないが、こいつから教わるのは少し嫌だな。
自分で学まつ。

翌日からじつやら訓練が始まった。

と言つても一度幼馴染と聖女様と他の何人かと会つて、騎士みたいな人に図書室に向かえと言われたぐらいだからまともな訓練を受けられるのは幼馴染だけなんだろうけど。

勿論その幼馴染は聖女様と共に訓練場へ。

他の人も皆女性ばかりで、幼馴染を囮うようにして行つた。
もうハーレムになつてゐるんだね……なんて思いながら、図書室に向かおうとした時だった。

「セー」のお前、レニア・フォーゲルを見かけなかつたか？」

「レニア様でしょつか？ええと確か……」

不意に後ろから掛けられた声の正体を知りうると身体の向きをそつちに変える。

そこにいたのは幼馴染と同類と言え、私にひとつでは忌避すべき存在つまりイケメンだつた。

どうして話し掛けられたんだ、と思いながらさてあの女はどこへ行つたか、と考えてはたと思いつく。

そういうばこの教団にいるものは皆聖女様と呼ぶのに、田の前の男はフルネームで訪ねてきた。

立ち振る舞いとかそこら辺の人とは違つし、なんだか華やかしいし……もしかして結構な御偉いさん？

『その可能性は有り得ますね』

『つかあの口ぶりはなんだつつの』

お前つてなんだよ。

でも心の声はしまったまま。
口調は上品に。

「確かに訓練場の方に向かわれたと思います」

「訓練場に？」

「先日、勇者様が召喚されて」一緒に付き添われているみたいなん
です」

「そういう事か。済まないな、足止めさせた」

「いいえ、とんでもございません」

謎の銀髪美青年の背中を見送りながら図書室へ向かおうと体を反転
させる。

背後から聞こえた「あのクソ女何処で油売つてやがる」なんて、私
ハearingティナイ。

でもある人綺麗な色の髪だったのに、アホ毛（つていうか跳ねてる
の？）が酷かつたな、そーいや。

図書室に入つて、異世界でもやはつこの空間は変わらないと知り、
テンションが上がる。
この閑静さが私を癒すのだ。
そしてあの幼馴染が起こすトラブルから回避できる空間でもあるの
だ！
人の気配が全くしないこの空間で、集中して取り組めるのは嬉しい。
いつも妬みとか見下した目で見てくるあの聖女様に今なら感謝の言
葉が言えるだろ？
よし、読むぞ！と意気込んで本のページを捲る。

「…………」

そういうえば言葉は分かっても文字が分からないんだった。

がっくり頃垂れる私に、フォルマーがとんでもない言葉をもひす。

『現代ティネルダ語は読めませんが、私の力で古代語ならば読む事が可能です』

いや古代語読めてもねえ……近代の歴史とか現代の国事情とかあるじゃない?

そういうのを一応頭に叩き入れておこうかと思ったのだけど、まあ仕方ないわよね。

それに一昨日ぐらいい前に文字の習得って考えていたし、言語がなくなつただけなんだから簡単よね。

まず文字を覚えるには絵本が良いだろ?。

私達も絵本を読んで覚えた。

そこからハイペースで単語を覚えれば問題ない。

『フォルマー、幻術で私の分身を創りなさい』

『御意に』

「ああ、ここから出ぬぞ。」

身なりも上等でとても美しい女性が、働いている本屋へとやつてきた。

遠田でも分かる程肌はとても綺麗で、日焼けなどした事もないよつな……そう、まるで深窓の令嬢。

すっと細く高い鼻、そして長い睫毛が茶色の田を影で覆つ。真剣に本を読んでいる眼差しが、近寄らせない雰囲気を漂わせている。

細い指がとても女性らしく、彼女が本を捲る度に綺麗な所作で動く

から田が全く離せない。

長いブラウンの髪が陽に当たつて神秘的に映る。
なんと美しいことか。

思わず恍惚の溜め息が出る。

絵本読んでるけど関係ない。

立ち読みで、全く買う素振りが無いけど問題ない。
彼女がいるだけで客が入つてくる。

そう、さつき店長が呟いてたんだから問題ないだろ？

「（ああでも、婚約者とかいるんだろうなあ……）」

夕方になると彼女は帰つていった。

朝から夕方まで立ちっぱなしだったといつて、疲れすら感じさせない足取りで颯爽と帰つていった。

その所作もまた美しく、思わず常套句を言つのを忘れかけていた。

「あ、ありがとうございましたーー。」

おお、つこに話しかけてしまつた。

来た時は緊張で言えなかつた。

「また明日来ますわ」

声に振り返つた彼女は微笑みながらそつ宣言した。

真剣に読む表情しか見てなかつたからか、つこり笑う彼女の顔に
顔が熱くなる。

可愛い。

ただその一言に及ぶ。

だらしない表情を見た店長にからかわれるまで、俺はそこですつと彼女の背中を見送っていた。

昼に古本屋を早くに見つけられたため、夕飯の時間までそこで絵本を読み通してきた。

何度も読み、フェルマーと共に文字を覚え、つたないながらも思い出しながら紙に書いていく。

どうも英語に似たような文字だったため、覚えるのは至極簡単だったが少し似ているとなるとどうしても知っている方が出てきて邪魔してくれる。

だがフェルマーは全く知らないから、間違えそうになるとちゃんと伝えてくれるおかげで一日の内にアルファベットに似たこの世界の文字をマスターできた。

あとは単語を覚えていくのみ。
早々に就寝した。

あつという間に一週間が経つた。

というのも、殆ど何か問題が起ころる訳でもなく、一週間は文字と歴史の勉強。

歴史は分からぬ部分はフェルマーで補うが、なるべくならば自分で知りたいもんだ。

あとの一週間は魔術の訓練に励むだけの期間だつたから、別に言わなくても良いか。

異世界人である私と幼馴染は、魔王を倒せと言われている。幼馴染の特訓も終わり、後は魔王を倒す力を各地で見つける為に旅立つだけだ。

つか何で私達なんよ？あの時話分かんなくてスルーしてたけど、こんなのは人の尻拭いてやつてるだけじゃない。

自己犠牲精神？何それ、おいしい？

命がけのボランティア活動なんて、そんなものやりたくないわ！

『御主人、そろそろ……』

『そうね、さつさと行かないとまた小言でも言われそうだわ』

これから港がある国へ行くらしい。

この教団は海側に面していても山脈があるおかげで、わざわざ港がある国に行かないと大陸から出れないんだと。

そして船に乗り、他の大陸へと向かい、魔王を倒す手段を確実にしていくらしい。

でも私は殆ど話を聞いてなかつたし、聞く気もないでああいれば良いからつてぐらいい。

本当の所、使えないけど異世界の人間だしつていう理由でどつかの
お偉いさんの夜伽にされそうだ。

そんな状況にならない事を今後も祈りたい。
とまあ、足手まとい扱いではあるけれど、世界を巡れるのは楽しみ
でもある。

「では皆さん、準備はよろしいでしょつか？」

聖女様が素晴らしい微笑みを携えながら出発を促す。

聖女様と幼馴染の一哉君だけでなく、他数人がどつかの部屋に集合
していた。

一哉君なら何人かと話しているんだろうけど、私は聖女様から図書
室に閉じ込められてたからあとは全然分からぬよね。
だけど一哉君も知らない人がいたらしく、聖女様がはりきっていた。

「まずは騎士団長、お願いしますわ」

「はっ！私はヘレー・ネ騎士団団長ミラ・ライガルと申します、以後
お見知り置きを」

金色の髪が目立つ若い人つてだけしか印象が出てこなかつた。
つまるところ、美女でしたーはい次。

多分、この人も一哉君のハーレムメンバーになんだろうね。

「ところでリーダーが加わつても平氣なのか？」

「はい、彼女がこの旅に加わつている間はライル副団長が代理を務
めます」

「紹介に『りました、騎士団副団長ライル・ディーゼルです』

女性の騎士団長さんだつたから、副団長もつて思つたら普通に男の
人でした。

はいはいイケメンですねー。

「そして私、レニア・フォーゲル、ヘーネ教団所属の巫女です。以上が我々ヘーネ教団ヘルラントからのメンバーです」

やつぱり自分の事を聖女だなんて言わないよね。
てか、え？他にもどつからか来るの？

と思ってたら、タイミング良く扉からノック音が聞こえ、優雅に男女1人ずつ部屋に入ってきた。

銀髪の男性が聖女様の前で止まる。

聖女様が軽くお辞儀をして挨拶を始めた。

「この度は我々ナディール勇者一行と共に同行してくれる事を有り難く思います」

「こちらこそ、勇者と共に世界の敵でもある魔王軍を倒せる事をとても誇りに思います」

その挨拶の間にも、濃紫の髪の人は頭をずっと下げたままだった。

『そういえば、この人って一週間前に会ったよね。あのクソ女ビンだよ？って言つてた人』

『そうですね、こんな会話バレたら首刎ねられそうですが』

「私は隣国のエレヴァン皇国国王第一が子息、クレイ・ティエラ・A・エレヴァン。貴公らと共にナディール勇者一行として旅に同行する事になった。こちらは私の信頼できる臣下のレティだ」
「初めてまして、皇室親衛隊隊長レティ・ベレッタです」

あの銀髪のアホ毛がぴょんぴょんはねてた人は皇子様だったようですねー。

さっきの頭下げてた濃紫の人は隊長さんみたいで、一見礼儀正しい
んだけど、なんか冷徹つて感じがするなー。
異世界でも親衛隊つて皇族の私兵なのか。

そしてメンバーが豪華だ。

勇者様と聖女様に教団の騎士団長、そしてその部下2人（どっちも女性）に隣国の皇子様とその親衛隊隊長がいれば問題ないと思つ。でもまだ知らない子が一人いた。

何処の国のです？

「じゃ、次は僕達だね」

「はい、お願いたします」

「ギルド国家アヴァンドールから派遣された者です、僕はロス
右に同じく、僕はトス」

ロスと名乗った少年は白い髪で、トスは正反対の色をした黒い髪だった。

双子みたいで、二人とも同じ服を着ていた。

杖も色が違うだけで形状は変わらない。

なんか一人してりんごみたいな髪型してゐるし。

「では最後に勇者様、自己紹介のほどを

そういうた聖女様の視線はやっぱり一哉君でした。

ねえ、やつぱりこの聖女様人として軸がぶれてんだと思つ。

別に勇者やりたい訳じゃないけど、今私の立場は勇者（仮）なんだ
から少しばらし礼儀ぐらい持つたらどうなのよ？

『御主人、何処の世でも聞かない人間はいるのですよ』

『そんな人生悟つた事聞きたくないわ』

「俺はカズヤ・サイトウ。職業は勇者みたいで、年齢は18歳、好きなものは海老と豚肉と、嫌いなものは……」

「あのカズヤ様、そこまで言わなくとも良いんですよ……？」

「へ？ ああ、『めん！』

「い、いえ！」

そういうや一哉君は緊張すると今までの性格が変わつて天然さんになるよね。

余計性質悪いわ！

「で、では最後に自己紹介をお願いします」

「がんばれよ玲一」

なんだつて君は自分の番が終わつたからつてそんなりラックスしているのよ？

「レイ・カゲミヤです。今後ともよろしくお願ひいたします」

まあ、その今後がいつまでか知らないけどさ。

ギルド国家アヴァンドールに着くと、すぐに船に乗ると言われてこの街を楽しむ事なく陸地から海へ。

魔王は既に復活している、っていうのは噂話にしか過ぎないけど、活気ある街でもそれなりに重い話題として話されるらしい。大国と言われるファネスの軍力に魔王一人が匹敵するほどだとそんな噂話もしてた。

そのファネスっていうのは最近出て来た新興国で、技術力も申し分ないらしく、三大国としてカウントされてる。

というのも歴史の本からだ。

こういうのもあるからある程度勉強しておいて助かったわ、本当。そして私達は今、船に乗つてこのナディール大陸から隣の一二ヴァーナ大陸に向かっている。

でもね、船に乗る前に船頭の人に「今日は嵐が来るかもしねりない」とて言われてたのよね。

快晴なんだけどなあ……でもこここの天候なんて知らないからここの人々の言うとおりにするのかな。

と思つたらあの聖女様、無理矢理船出せつて言いやがつた。

「レニア、嵐が来るって言つてるんだから、今日は宿屋に……」

「大丈夫ですわカズヤ様。私、未来を予知する能力があるのです」

もう既にこの人がごり押しする時点で嫌な予感しかしなかつた。

晴れてたのが、今じゃ嵐がこの船に近付いてる。

何が予知能力あります、なのよ。

……もしかして本当にやつちやつの？殺る気なの聖女様？

「ユーラー。」

「も、申し訳ござりません！ですが、すぐこでも治まるかと……。」

強く吹いていた風に乗つて降つてくる大粒の雨が凶器になつてきました。今すぐ着替えたい。

一哉くんは聖女様にすすめられて制服から勇者っぽいのに着替えているけど、私に用意された服はどれも裾の長いもので動きにくいう理由で制服を着てた。

2週間の間はずつと借りてたんだけど、びちゃ濡れになつてもいつもの方が動きやすいと思う。

そろそろ田も開けられなくなつてきて、後は船員さんに任せて服を着替えようと思つて船室に向かおうとした。

「聖女様……？」

「あなたにはここに消えていただきます」

行く手を阻むよに聖女様が杖をじあらに構える。

あなた本当に殺る気ですか。

『御主人、危険です！』

「リヴァイアサンに飲み込まれなさい」彼の者を吹き飛ばせ ウ
インドフル

鈍い痛みが肩にきて、聖女様の歪んだ顔が私を睨みつける。海が私が落ちてくるのを待ち遠しく思いながら待つてゐる気がした。視界の隅で一哉君が手を差し伸ばしていた。

全てがスローモーションに動いている。

嗚呼、やつぱり！一哉君、手綱ぐらいいきちんと握つてなさい。

恋する乙女の暴走度なんて凄まじいんだから。

「ジレニアーーー。」

「は、はいーーー。」

「何故玲を突き飛ばした、彼女に嫉妬したというだけでお前は海上に落としたのかーーー。」

「も、申し訳ございません……。」

「俺に謝るな、彼女に謝れ。…………もつとも、あいつが生きてたらの話だけどな。」

自分がやった事に反省し、項垂れる彼女を見て少しの罪悪感が浮かぶ。

けどそれはそれで、これはこれなのだ。

彼女がやつた行いは、信頼を失くすのに相応しい。

少なくともこれは一哉からの主觀であつて、当の被害者である玲はどう思つていたのかは分からぬ。

生憎とあの場面を見ていたのが一哉とジレニアだけだったこともあり、今は嵐が治まつた青空の下、話し合つてゐる。

ジレニアはただ謝罪の言葉しか言わない為、一哉が一方的に喋つてゐるだけだが。

一哉の中でも言いたい事は沢山ある。

しかしそれを抑えて、溜め息の後に言つた。

「玲の事は、嵐の中行方不明になつたと言おつ。それで良いな?」

「……はい。」

どこか確信があった。

生まれた場所は違えど、双子のよつと育つてきただの自分と彼女。よつと生き延びてゐる。

今自分がやるべき事は引き受けた使命を貫き通すだけ。

片割れならばいつかまた、出合えるはずだ。

れぞれなみを聞きながら田を覚ます。

眩しい太陽が目に入つてきて、耐え切れず顔を背ければ砂が直撃。

「ふはつー」

思いきり身体を起こす羽目になつて良かつたのか悪かつたのか、意識がはつきりしてきた。

もうちょっととだらだらしたかつたんだけど……なんか日差しが痛い。起き上がりつて周りを見ると、どこかの南国の島みたいだつた。目の前は先が見えない程の森林、後ろは綺麗なターコイズグリーンの海。

「フェルマー、地図」

ブックホルダーから取り出した本は全く濡れてなかつたけど、まあフェルマーだし。

適当に開いたページにほこの辺り一帯の地図がじわじわと『』りだした。

見たところ、森を抜けるしか町に出れなさそう。

あれからどんなぐらい経つたのか、今何時か分からぬから陽が暮れる前に町に行きたい。

波にさらわれていた身体はだるく、こんな状態で敵に襲われたらひとたまりもないだろうね。

ちょっと眠くなつてきたのを堪えて足を動かした。

「はあ……なんかじめじめしてて気持ち悪い」

べつとりと肌にシャツがくつつく。

徐々に体力が蝕まれていくおかげで足の歩みも遅くなつていく、はずなんだけど。

足場が悪いこのジャングルを1時間歩いてても疲れないのつて、これまた異世界補正値？

なんて考え方してたら雨が降り出した。

スコールに降られて、最悪だと思いながらブックホルダーを傘代わりにして雨宿り出来る場所を探して走る。

ブックホルダーには図書室で見つけた水捌けの魔方陣が書いてあるから濡れても全く問題ない。

と言つても視界がはつきりするぐらいで服とか濡れちゃうんだけどね。

しかも走る度に跳ねる泥が煩わしく感じるし靴はショートブーツだから走りにくい。

「見えたわ！」

縁の中にちらほらと見えてきた白い建物に自然と足は速くなる。ついつい気を取られていた私は背後からやつてくる気配に気付けなかつた。

『御主人！敵が』

「え？』

振り向いた途端、頭を誰かに殴られて気絶してしまった。

すつせりとしない田覚めの所為で瞬きは遅く、田を開じる時間も長い。

ぼやけた視界をどうにかすべく田をこすり、はつきりせりから起き上がる。

『おおおおおお……お田覚めになられたのですね、私はもうこのまま田を覚められないのかと心配で心配で……』

「朝からひつひつや二」

『申し訳ございません。ですがこの気持ちは嘘偽りなくですね』

『その気持ちは痛いぐらい分かったわよ』

窓を見遣れば朝陽が差し込み、鳥の鳴き声が聞こえる。

昨日氣絶させられた時がもしも午後なら、半田近く寝ていた事になる。

海に投げ落とされた疲れもあつたんだろうか。

段々と田が覚めてきた事により、周囲に田を見遣る余裕も出て来た。

ダブルサイズはありそうでかいベッドで寝ていたようだった。

部屋を見回しながら、魔力で精製したホームで髪を纏める。

長いドレスのような寝巻きに着替えられていたが、すぐ近くにあつたクローゼットの中を探ると、綺麗な状態で制服一式が掛けられていた。

裾が長く邪魔な寝巻きよりかは制服の方が良いと思つ。

五分と掛からず着替え終わり、ブックホルダーを腰に取り付けフェルマーの書を取ろうとした時だった。

軽いノックと共に声が掛けられる。

「おはよハジヤルコモク」

恭しく頭を下げられながら挨拶されたおかげで、つられてこちらも頭を下げる挨拶を返す。
まるでオウム返しのようだ。

「朝食の用意はできておりますが、いかがなさいますか?」「ぜひ、いただかせてもらいます」

「恐まりました。屋敷の主も『一緒にですがよろしいですか?「そこ』でどういった事か、聞かせていただけるのかしら?」「勿論でござります」

『フェルマー』

『はい』

『次、しぐじつたら置いていくわよ』

『つー? そ、それだけは』勘弁下せませ!』

念話だけど、フェルマーが土下座しながらそう言つてくるイメージが浮かんできた。

別に一枚一枚紙を破つて火の中に突つ込むぞつて言つても良かつたのだけど、こちらの方が効くだろ?と思つたら……効きすぎだったみたいでまあ炎を据えるのに丁度良かつたかな。

「私はブエラ・フォン・エチュード伯爵。君を保護したのは私だ、随分と手荒い真似をしてしまった」

「いいえ、伯爵様のおかげで私は『立派な屋敷で目を覚ませた事、心より感謝致します』

『「」いつの本音を読み取れるかしら？』

『本音とは言わば心の闇。読み取れないはずが『」ぞこません』

『あとこれはついでで良いわ。屋敷からの脱出経路とギルド国家への経路をお願い。私の魔力を存分に使いなさい』

『御意に』

大体こういう人好きの良い笑顔を浮かべる人間は本当のお人よしか、利益目的の人間に分かれやすい。

こりや本当に夜伽にされちゃうのかしらね。

まあそんなもんにされる前にここから逃げ出してやるナビ。

「調子はどうだい」

「はい、とてもよろしくですわ」

伯爵が何も手を付けていない事に気付いて食べると薦める。

勿論伯爵は貴族らしく上品に食べていく。

何か入ってるかもしねないのに薦めるつていう事は、気の利かない人間、か……？

だとしたら随分と詰めの甘い人間だこと。

利益目的ならもうちよい人を信頼させて騙させる方法でも学んだいた方が良いんじゃない？

「本題に入つてもよろしくでしようか」

「ああその事だったね。でも今はとにかく食べなさい」

「はぐらかすという事は何かあるんでしようね」

「何か、とは何だね？」

「そうですね。例えば……毒とか」

びっくりと反応した伯爵に、思わず心の声でシツ「」IIをこれてしまつ

た。

いやダメだろセヒド「反応しちゃ。

本音が結構駄々漏れだつた面、まあ意表は付けたけどさ。この世界、閉心術つてないのかしらね。

まあこれは某魔法学校の話だから止めておきましょつか。

「何故、その料理に毒が入つていても？」

「あら。そのような事はおつしゃつていませんが？」

ああやつぱり朝から水を飲まないのは辛いなあ、とセヒド初めてテーブルの上に置いてあるものに手をつける。

グラスの中に注がれた水を一気に嚥下し、一息を吐く。ん？ なんだか口の中から食道辺りに掛けてぴりぴりする。だが数秒経てば治まつた。

ふむ、どうやら解毒効果が出来ていいようだ。魔力が多いことイイコトも多いみたいで。

「ひつ……ー?」

「おや? どうやら間違つた選択をしてしまつたみたいだな

どんな毒の効果も知らず、適当にベタな演技をしていくと、伯爵は呆気なく本性を現した。

床にひれ伏す私の元までやつてくると、彼は卑しい笑みを浮かべながら見下ろしてくる。

「君はとても美しい。本当ならば市場に売りたい所だが、特別に我が国の公爵様の側室にしてやる。じつだ、素晴らしい名誉な事だ

るつ?..」

「それあなたは晴れて侯爵、ですか?」

「どういう事だ……? 神経毒を飲んだはずではー?」

はいはい、うるたえてるのも良いやうで、せつと持ち直せてしまひの貴族だらう。

靴で歩くよくな場所で寝そべるのは好きじやない。

すぐさま起き上がつて伯爵の動きを影で縛る。

「な、何を……？」

「その、廻室の話？ だつたかしら。こいつは伯爵様がなさればよろしいかと」

「はつー？」

じわじわと姿形を変えていく伯爵が茶髪の美女へと変化していく。こいつの反応が見れないのが残念だけど、運の神よ、こいつを使って楽しんでください。

「いの方でよろしくか？」

こくり、とただ頷くだけの伯爵に、御者は何も言わずに身なりを整えた茶髪の美女を連れて屋敷からやつと去る事にした。馬車が遠く離れていく事、誰も見ていない事を確認するとエチュー・伯爵から茶髪の女性へと変わる。

『楽しめるといわね、伯爵様』

『そこまで仕返しなさいますか……』

『だつて、ねえ？』

フェルマーに本音を読ませたのと、記憶を読んだ事で大方どうして私がここにいたのか分かった。

あの伯爵は何者かによつて唆され、私兵を使って私をここまで連れ

てこさせた。

そしてその何者かは私の特徴を話していく、且つそいつは私を狙っているという事だ。

何者か……その公爵様を指してゐるのかしら？

まあ今後気をつけていても損はないだろう。

それと伯爵の屋敷から小振りの宝石を二つと、少量のお金と外套をくすねさせてもらつた。

こちらに帰つてきたときに取りすぎて気付かれても嫌だし。
帰つてこれるかどうかなんて知らないけど。

坂の上有る屋敷から、街を眺める。

そこそこ良い暮らし出来ているようで、建物は立派だった。
なんかあの伯爵には悪い事しちゃつたな……でもこれはこれで、
あれはあれだし。

「それもどうでもいい事ね」

外見というのは時に重要だ。

油断させるならば娼婦の格好も良いだろう。

女というのを隠すのであれば、肩幅を広く見せて顔を隠してしまえば良いだろう。

ついでに女性らしさのラインを隠せるように「つぐら」いサイズがでかい服も着て。

まあ何が言いたいかつていうと、服選びで大変よねつて事。

「お客様は旅の方なんですか？」

「ええまあ」

「それでしたらひらなんてどうでしょ?」

可愛らしい店員さんが差し出してきたのは腕の裾がやたらと広く、首元まである上着だった。

かれこれ動きやすそうな中で気に入った女性服が見当たらなかつたからこれで良いか。

ブックホルダーも新調する事にして、布から皮へと変える。

……つかなんだつてあんな露出度高い服着なきやならん。

あんな、背中丸出しのノースリーブみたいな着て寒い場所とか行けないわ。

外套と体を温める術をいくら使つても精神的に寒気が走りそう。

ズボンは呆気なく決まつていた為問題ない。

黒の短いズボンに黒タイツにショートブーツ。

『それだけでは怪我しないでしょうか?』

『そうかしら?……あとで防具屋でも行つた方が良いわね』

人からくすねたお金で払つても何にも思わないって、帰つたら犯罪者になりそうだわ。

一通り買い物を済ませ、港へと歩いていく。
お金は無駄な物を買わなきやすぐにはなくさないぐらにある。
けど、そういうのは無限にある訳じゃない。
いつかなくなるのは日に見えている。

その前に就職口を見つけられたら良いんだけどね。

あ、ちなみに防具は高くて手が出せませんでした。
ここでは私は無尽蔵？程ある魔力を使って足の防具を創りました。
意外と軽い材質なのか、全く重くない。
うん、良いね。

そんなこんなで港に着くと、船頭らしき男と大男が言い争つていた。

「良いから船を出せ！ つってんだろ！！」
「だから、あなたは人の話を聞いてなかつたんですか！？」この近海
には今リヴィア イアサンがいて、容易に船を出せないんですよ！
「知らねえな。リヴィア イアサンだかなんだか知らんが、俺のこの歩
みを止める事は誰一人許さねえ！！」

『……馬鹿なの？』

『倒す自信に満ち溢れているからなのつですね』

『でも武器を持っていないわよ？』

そういうえば、リヴィア イアサンといえばあの聖女様が言つてたな。
食われる一つって言いながら突き飛ばされたものねえ。
ん？リヴィア イアサンってあの神話の？……そんな事はどうだつて良

いか。

船は出せない、いいや出せーとこいつやつとつをBGMに、フェルマーの書を開いて地図を出せせる。

運良く一哉君達の田的である「ガーナ大陸に辿りつけたようだつた。

この大陸には新興国ファネスがあり、ここから東の方には首都があるみたいだ。

この街ベルルカはファネスの地方都市つてところかしら。

『ここのまま首都行く？それともギルド国家に戻るべきかしら？』

「おい嬢ちゃん。アンタもリヴァイアサン狩りに行くのかい？」
「え？」

「ここに残つてゐて事はそういう事だら？まれ、船に乗るぞ」

男一人が挟むように船へと連れて行く。

いつの間に討伐フラグ立つたんだ。

船まで行くと、さっきまで船頭と言い争つていた男がこちらに気付いた。

「あ？なんでもてめえら女連れてきやがつた？」

「親方、こいつも戦いてえらしくて」

「こんなひよつこみてえな奴が？くつくつく……がつはははは……」

お？なんかすっげえむかつくんだけど。

まあ実戦経験はそんなにないからどうでも良いけど、強くなつたらこいつを真つ先に潰しに行こう。

「良いぜ。てめえのその日、気に入った」

え、何この展開。

いや一番最初に戦ったのは確かに弱そうな獣系だったけど、いきなりこんな無謀なボス戦行っちゃう?

……まあダメだったら死ぬだけだもんね。
そうそう死んでやるつもりはないけど。

男はにやりとしながら右手を差し出してくれた。

「俺の名はスタイン。スタイン・アルフォードだ」

「私はレイよ。よろしく、スタインさん」

そう言ってスタインは豪快に笑った。

「てめえ、魔術師か?」

「どうしてそのような事を?」

「見たところ武器を持つてねえからな。 その本が媒介か?」

「ええそうね」

「珍しいな。魔術一本つて事は相当な使い手か、はたまた駆け出しながら」

「……そこまで器用じゃないのよ」

スタインからの話を推測すると、魔術師は杖だけでなく剣も持つてるって事だろうか。

護身用と言つちゃ難だけど、持つてないとそれはそれで危険つて?
でもこのスタインも武器らしいものを持っていない。
周囲にあるのかと思つたけど、見当たらないし。

彼の部下達とも言えるメンバーは全員田に付くんだけれど。

「あなたも持つてないようだけど」

「あ？ ああ俺は特別なんだよ。ほれ」

そう言って見せてきたのは右腕に着けられたこのい腕輪だった。金色に輝く腕輪の中心では碧色の宝石が取り付けられている。

「こいつはな、魔導具って言われる中の戦珠つつう滅多にねえ代物だ。この中には武器が仕込まれてる」

「見せてくれないかしら？」

「ああ、良いぜ。見せるだけだがな」

眩い光の中に、それは具現化された。

スタンインはそれなりに大柄だ。

それこそ二メートルはありそうな身長だが、それと同等ぐらいの大きさの斧が出て来た。

持ち手は金色に染まり、豪奢な装飾の先には鋭い刃物がある。刃の中心部には腕輪同様に碧色の宝石が取り付けられていた。

「それはどこで手に入るのかしら？」

「てめえも欲しいのか？ がつははは……」の戦珠は世界に四つしかねえからな、諦めな

そう言って本当に見せるだけで、すぐにしまってしまった。

……あの教団は辺境地にあつたから、戦珠はなかつたのかしらね。いや、それにしても教団にしては色々物があつたような気がする。それに一哉君が持っていたのがもし魔導具の類だったら、フェルマーも魔導具なのかしら？

『どうでしょうね、私はあなた様以外の者にはそこいら辺にあるような本と一緒にですから』

そうだとしたら、何故あそこにいたんだか。

リヴィア・イアサンを狩る前だといつのに、天気は全くといっていいほどの晴れ。

そしてこの暢気な雰囲気に、普通の船旅だと勘違いしていまいそうだった。

先程の船頭に対する怒鳴りつぶつからは想像出来ないほど、今のスタイルは穏やかだった。

雷が轟き、黒雲による嵐が視界を遮る中、目標はその下にいた。リヴィア・イアサンは中国の龍のよつに細長く、そして海の中で自由に泳ぎまわっていた。

まるで私達の乗る船を歓迎するよつに。この場合、潰す勢いだらうけど。

「親方！ 前方に嵐が見えます！ おそらくリヴィア・イアサンかと」

男の指した先を見ていたスタインが頷く。既に手にはあの斧がある。

「魔導砲の準備をしておけえ！ …てめえら！ 奴と戦闘を始めるぞ！」

声を大きく張り上げて指示を的確に出していく姿は、またしても迫力のある存在へと変えていく。

これで見た目中年ですが二十代とか言われたら衝撃的だわ。

魔導砲と呼ばれたものが次に次に甲板に現れる。

主砲部分も準備完了、という声がすると、所々で続くよつに声が上がった。

「おっ、てめえは後ろで援護を頼む

「弱点は？」

「ああ。てめえで考えやがれ」

さつさと船首部分へと歩いていつてしまつた。

次第に船は波によつて横へ大きく揺れ出し、いよいよリヴィア・アイアンの目の前へと迫つてきている事が分かる。

『フルマー、私の体を床と固定する事つて可能?』

『私をなんだと思っていますか?』

『本』

『えつ?いや、私はですね、』

「お!嬢ちゃん!ぼけっと突つ立つてんじゃねえ!邪魔だよ!...」

「あら、『めんなさい』

『足の固定と周囲を見ておいてね』

『調整はなさらなくてよろしいのですか?』

『あなたの力を借りたら意味ないでしょ』

こちらに気付いたリヴィア・アイアンが、右舷側から船体に突撃していく。

大きく傾く中、スタンインの部下たちが海に落ちるのを阻止すべく、術を発動させる。

スライムのような球体で、敵を閉じ込めたり衝撃緩和を目的にした術だが、魔力で範囲を大きくした為、全員落とさずに済んだ。意外と範囲広かつたのだけど、疲れはないわね。

一応無属性として発動はしているんだけど。

弾力によつて弾かれたメンバーは驚きを隠せずにいたが、リヴィア・アイアンの尾が迫つてきている事に気付くとすぐに準備へ動く。魔導砲がリヴィア・アイアンの胸を攻撃するたびに術式が浮かび上がつてくる。

様々な色の術式が浮かび上がつても、穴を開けるような破壊力はなさそうだった。

それほどまで、リヴァイアサンの体は堅じようだ。

一方、船首部分ではスタインがリヴァイアサンの顔に向けて攻撃していた。

喰らいつこうとするリヴァイアサンに対し、スタインはあのでかい斧を片手で器用に扱い、痛手を与えていく。

船首部分に乗り掛かるように、腕でがつちり掴んでいるリヴァイアサンの体を船伝いに拘束する魔術を発動させる。

無論、こちらも無属性として。

巨体の所為で全身を拘束する事は叶わなかつたが、スタインにとつては好機だつたようだ。

遠目からでも分かるように、リヴァイアサンの左目に斧が大怪我を負わせた。

青い血を噴き出しながら海の中へ逃げ込んでいく。

それでやられるならとつぐに討伐できているだらうね。

さすがに出てきてもらわないと攻撃が出来ない。

メンバー共々、嵐の中リヴァイアサンの登場を待つ。

雷の轟きだけが静寂を切り裂く中、誰かが叫んだ。

「来たぞーー後ろだーー！」

殆どのメンバーが船首へと移動していた所為で船尾にいたのは私だけだつた。

固定を解除してもらい後ろを振り向くと、リヴァイアサンは船首の時同様、腕を使って乗り掛かっていた。

「！」

大口を開け、右目だけの睨みでも迫力は凄まじい。

死なないよつに精一杯の結界を張り、遠ざけるべく爆発の術を使おうとした時だった。

『スーシャは喰らえぬ。お前を喰わせろ！』

口から魚の腐ったような臭いが周囲に蔓延る。さすがに臭いまでは遮ってくれないらしい。

某最後の物語でもある臭い息つてステータス異常技だから、臭いも遮つた方が良いかも。

『この方をディレンタ様と知つての狼藉か』

フェルマーが例の黒髪美青年の姿で私の前に現れる。半透明なのが気に掛かる所だけど。相変わらず羨ましい限りの美貌で…… つてそんな事今は考へてる暇ないか。

『ああ知つてるとも！ ディレンタをえ喰らわば我が治世が始まるのだ！！』

……はいはいとんだ中二病ですこと。ちなみに現実ではリヴィア・イアサンが咆哮をあげているよつにしか聞こえない。

フェルマーと念話で話すよつに、頭に直接響いている感覚だった。

『フェルマー、もう良いわ』

目を瞑り逃げ出さない玲に、リヴィア・イアサンが勝ち誇る笑みを浮かべる。

スタインは喰われそうな玲に逃げると叫びながら近付くが、荒波の

所為で中々進めない事にイライラしていた。

半透明状だったフェルマーは既にいなくなっていた。
リヴィア・イアサンがゆっくりと玲の前までやつてくると、口を大きく開け、そして。

「喋ってる暇があるのなら、さつさと食べれば良かったのよ

大きく開ける口を開ぎ、一本の黒い槍が雷を纏つて突き刺さった。

その一本が合図だと言わんばかりに複数の槍が次々とリヴィア・イアサンの体を貫通させていく。

あまりの痛みに声を張りあげようにも槍が突き刺さっている所為であげられないもどかしさを感じながら、リヴィア・イアサンは船から離れ、その巨体を海面へと打ちつけた。

徐々に海中へと身を沈めるリヴィア・イアサンが見えなくなると、後ろから歓喜の声が上がった。

半壊気味の船で長い時間を掛けてようやく港に着いた。

動力源とも言える魔石が生きていても、船体が耐えられないという理由で風に乗りながらのんびりと帰ってきた。

またあの時のように海に放り投げられるのかと思つていた為、陸に足をついた事に安堵の溜め息が出る。すると、先にメンバーと共に船から降りていたスタンインが足を止めてこちらをじっと見てきた。

じつと見られると歯痒い思いするんだよね。

単純に注目される事に慣れてないだけですけど。

「てめえのその本は精靈付きだな？」

「精靈……つていったら確かに精靈ね。ええそつよ」

「そういうのは大抵魔導具に括られる。この戦珠の一つ、『ディアボロスの斧もそうだ』

『確かに、精靈のようなものを感じますが実体化は出来ないよつですね』

「ふうん……あれディアボロスの斧っていうんだ。

それにして、さつきは名前すら教えてくれなかつたのにね。

なんかフェルマー関連で気付いた事あつたのかな。

「てめえのは俺の持つてるものと違つ。そいつは魔導具を持つてるから分かるのかもしねえがな」

ふむふむ、魔導具を持つものはそれに対しても敏感、と。

そういうえばさつき本を出したけどあの時は何も言つてこなかつた。それは力を引き出した場合なのかしら？それとも単に魔導具の力関係？

「普通の人間じゃねえよ。そんな化け物みてえな魔導具持つての奴はな」「

『化け物だつてさ、フェルマー』

『いやあなたもそうですからね』

まあなんだかんだ言つてさ、テンプレだのビツのヒツの血ひじやない？

でもそれって何も知らないとしないでただ目の前の事を眺めている感覚がするのよ。

ああはいはい、この展開ですかーって呆れてるだけ。ただ流されるのは好きじゃない。

それに、フェルマーがどういった代物なのか知らずに所持しているんだから少しばかり興味を持つべきよね。

もしかしたら元の世界に帰れるかもしないんだし。

この世界を旅して帰れば新たな価値観に出会えるかもしれない。

まだまだ先は長いだろうし、帰る手段を探すついでに魔導具つて何なのか、つて探すのも良いよね。

「だけどあなたはそこまで私に言つておきながら敵意を持たない」「てめえには勝てねえ。これでも三十年はギルドやつてんだ」

先程のリヴィア・アイサンを倒したおかげで航路は開けた。

人々が歓喜の声を上げながら、先に行つたスタインのギルドメンバー達へ群がる。

そんなメンバー達を見るスタインの目は親が子を見るようなものだ

つた。

「俺には守るべき存在がいる。こんな所でやられちゃあ終いねえだろ?」「

こっちの方が敵わないつつの。
悪態は心の声だけに済ませる。

大体化け物呼ばわりされたら迫害されるのかと思つたけど、スタイルはそんなに器量の狭い人間じやなかつた。

なんと心の広い事か。

最近心の狭い人ばつか見てた所為かな。

「……闇の魔術使える奴つてのは珍しいんだがな」

「! どうしてそれを」

「さつき普通に使つてただろ? どうだ、てめえ一人ぐらいなら養つてやれるぞ」

一応無属性として幻術を掛けていたんだけど、魔導具持ちだからばれるのかしら。

スタイルの口ぶりからして、闇属性は希少種でも忌み嫌われる力ではないようだ。

ならばガンガン魔術使つていつても問題ないだろ? 今度は魔力が切れるまでどこまで行けるか。

「遠慮しておくわ。次会つた時に今回の礼をしていただくな」

「そうかよ」

スタイルを見送り、何気なく空を見上げれば水平線の向こう側では既に太陽が沈んでいた。

橙色を追い出すように藍色と星が空を覆つ。

「宿は絶望的かな」

『『じつする？今日は朝まで起きている。』』

『一応あの魔獸と戦ったのですから、休まれては如何でしょうか？』

とは言われても、スタインのギルドが頑張ってくれてたから少し魔力の密度を上げるぐらいでトドメを刺す事ができたから疲れてないのよね。

うーん……やつぱり異世界補正值？

いやいや、現実的に考えてみよつよ。

もしかしたらこっちの世界の重力が地球と比べて軽いだけなのかもしないし。

それで体力云々の話がどうなるかって聞かれたら知りませんけど。

「あら？」

いくつかの宿屋を回つても既に満室状態で断られ、諦め寸前でようやく見つけた宿屋の前では若い男がゴロツキに絡まれていた。

「ぶつかつておいて謝りもしねえのか？」

「いや、俺ホント何もしてませんからーぶつかつてきたのはそっちじゃないですか」

うわ青年哀れだね。

「ゴロツキに絡まれちゃつたら相当口の回る人間が、腕の立つ人間じやなきやこちらの安全なんて保障されないよな。

とりあえず、やつと日星付いた宿屋の前で邪魔なんだよねえ。はあ……お腹すいた。

見れば三人がかりでひょろい青年一人を囮んでいる。

中央の男が青年の前で肩を押さえながら睨み、青年の両肩にいる男女二人が逃げ道をなくしている。

で、後ろには私がいる、と。

「ああ？ オメーがぶつかってきたからこいつの肩がイカレちました
つて言つてんだよオ」

むしろ筋肉もりもりじゃないつすか、その怪我を負つた人。
いや、三人とももりもりだけど。

「感謝料払つてくれよ、オメーの責任だぜ。こいつは俺らの大事な
ギルド員なんだからなあ？」

そうだね、その青年がもじぶつかつてきてそいつが怪我したら医
者の所に連れて行くべきだね。
うん、邪魔。

「言いがかりにも程があるだろ……」

「オイ！ 何ぶつぶつ言つてんだ、文句ならこのオレ様に言つてみ
ろよ」

その時、不覚にもお腹の音がこの辺りに響いた。

勢いよくこちらに目を向けた「ゴロツキ」がすかさず私を標的に捉えた。
いやだつてさ、このゴロツキ達の所為でこの辺り一帯に野次馬の一
人もいないのよ。

「なんだよ、嬢ちゃん。こいつの仲間か？」
「いやそいつは」

『いかが致しましょう?』

『問題ないわ、手は出さないで』

「ええそうよ。その青年の仲間」「話が早えや。こいつの所為でな、仲間が肩を脱臼しちまつてよお」「嬢ちゃんが金の代わりになつてくれるつてんならその男を許してやるんだがなあ……?」

下品な笑い声が耳障りだこと。

大方私を慰み物にしようとしているのかも知れないけれど。街中だとどれだけ魔力使って良いか分からぬから、術の範囲が狭くなつちやうのよね。

「残念。それは無理な話ね」

「じゃあ仕方ねえな。力付くで付いてきしもひおいつか」

一人の大男が一步近付く。

あーあ、範囲に自分から入つてきりやつた。

私は悪くないわよー。

「そうそう、脱臼は一時間以上放置しておくと全身麻酔してから手術が必要って知つてたかしら?」

「はあ? 何を突然訳のわから い、つ!?

「ぎやあつ!?

「いでえ……いでえ!」

三人とも肩を押されて地に伏した事に、青年が驚いた顔で宿屋の壁に後ずさる。

罠用に開発した、範囲を指定し入つてきた獲物に対し攻撃してこないよう先手で攻撃できる術なんだけど、実は熊も相手できるよ

うに結構強く設定されているのよね。

え？何が強くかつて？そりや見れば分かるでしょ。

人間なんだから、脱臼で済んでるはずが無いわ。

骨折だったのが不幸中の幸いだったね。

下手したらもげてたかも。

「くそつ覚えてろよ、女！…」

「いてえ、いてえよ兄貴イ……！」

「つるせえ！黙つて歩きやがれ！…」

まあなんとも小悪党の定番とも言える捨て台詞だこと。

あ、ちなみに脱臼は一時間じゃなくてハ時間です。

筋肉質な「ロツキ二人を見送る青年に声を掛ける。

「大丈夫だったかしら？」

「あつ、ああうん。助けてくれてありがとうな」

「どういたしまして」

「女の子に助けられるとは思わなかつた。なんかすげえ情けない」

深い溜め息を吐いてしゃがみ込む青年の姿がかなり哀愁漂つていた。
彼の立場を考えれば確かにそうだけど、空いてそうな宿屋の前であ
んな騒ぎ起こされたらね。

魔術は私の唯一の武器だし、そりや脅しも含めて報復するわよ。

「夕飯、まだ食べれてないのよねえ……」

はあ、とわざとらしく左頬に手を付け、いかにも困つてますアピー
ルをする。

たぶんこの人かなりのお人好しで断りにくい性格かも。

ひつと視線を這わせると、彼の尖った耳がぴくつと反応する。

「お、俺とで良かったら、一緒に夕飯食べませんかーーー？」

「あら良いの？あ、お金……」

「奢るよそんなの！助けてくれたんだし、お礼はそれで良いか？」

「ええ結構よ。ありがたくいちとうになるわ」

よししゃ、ただ飯ゲット。

サブタイトル変更しました。

故郷から旅立つてもうすぐで三年経つ。

旅をしている理由は簡単だ。

親父から人生の伴侶が出来るまで帰つてくるなどまで言われたから。俺、本当は戦うのとかすつこい苦手なのに。

一度適当に見掛けた女の子を連れて帰つたら家族にも怒鳴られるわ、女の子からは強烈なビンタ食らうわ……もう散々だった。あれが俺の中で衝撃的過ぎて、眞面目に探して早く帰つてやろうと思つきつかけになつた。

だけど中々伴侶つてのは見付からないものだ。

その度に街から街へ行くから、戦わなきやいけないんだけど……。魔物相手ならまだ大丈夫だけど人は勘弁して欲しいとさえ思つてゐる。竜人族つていうのは力がありすぎて普通に殴つただけで人なら撲殺できる程だつて聞いてる。

え？ 嘘だろつて？ いやいや、目の前で一軒家壊すシーン見てみ？ 「この力があ前に受け継がれてる筈だ」とか親父、いらない事をよく言うんだよなあ。

それでも兄貴や姉貴達は上手く制御できて、人生の伴侶とも言える人達を見つけていた。

あとは末っ子の俺だけ。

はあ……いつたいどんだけ掛かるんだろう。

人間のように早く年老いていく訳じやないけど……

「いつてえなあ……おい、兄ちゃん。聞いてんのか？」

「へ？」

見ると三人組のがたいの良い男が取り囲んでいた。

もしかしてこれ、絡まれたのか！？

「ぶつかっておいて謝りもしねえのか？」

「いや、俺ホント何もしてませんから！ぶつかってきたのはそっちじゃないですか」

ちゃんと避けたはずだった。

柄の悪い男に絡まれても、力が強すぎて一体どうなるのが分からなくて手を出せない。

どうする事も出来ないまま、俺はただこいつらが飽きて去っていくのをただじつと待っているだけだった。

「ああ？ オメーがぶつかってきたからこいつの肩がイカレちまつたつて言つてんだよオ」

「感謝料払つてくれよ、オメーの責任だぜ。こいつは俺らの大事なギルド員なんだからなあ？」

男は肩を押さえている男を指差しながら、俺の肩をみしめし言つて程掴んでくる。

逃げ場が無いこの状況、最悪だ。

「言ひがかりにも程があるだろ……」

「オイ！…何ぶつぶつ言つてんだ、文句ならこのオレ様に言つてみろよ」

思わず口に出た言葉は運悪く男の耳に入り、更に力を込められる。

内容が聞こえなかつただけマシか。

お金を払つから勘弁してくれ、と言いかけた時だった。

後ろから「ぐううう……」とお腹の音が鳴つた。

誰だろうかと気になつてじろじろつき共々音の方を振り向くと、少女が

一人佇んでいた。

「なんだよ、嬢ちゃん。」いつの仲間か？

「いやそいつは」

「ええそいつよ。その青年の仲間」

違うんだ、巻き込まないでくれ。

そう言い掛けた言葉さえ飲み込むような返しだった。
まだ成人していないうらいの、か弱そうな少女は不敵の笑みを携え
ながらそう答えた。

「話が早えや。こいつの所為でな、仲間が肩を脱臼しちまつてよお
「嬢ちゃんが金の代わりになつてくれるつてんならそこの男を許し
てやるんだがなあ……？」

明らかにこいつらはこの少女を奴隸として売り飛ばすつもりか、何
かしら手を出すつもりだ。

少女のようなエキゾチックな顔立ちはこりでは見ない。

これからどうなるのか分からぬのか、少女は屈する事がなかつた。

「残念。それは無理な話ね」

「じゃあ仕方ねえな。力付くで付いてきてもらおうか」

ダメだ、その子は全くの無関係だらつー。

止めに入らうとしたら、もう一人の男に腕を取られ口を押さえられ
る。

あと少しで触れるという所で、少女は不意に何か呟いた。

「そろそろ、脱臼は一時間以上放置しておくと全身麻酔してから手
術が必要つて知つてたかしら？」

男の隙間から見えた少女の顔はゾッとするぐらい、綺麗に微笑んでいた。

「はあ？何を突然訳のわから い、つ！？」

「ぎやあつ！？」

「いでき……いでき！」

緋色の瞳が細められた時、黒い何かが横を通り過ぎたのを見た。

突然解放されたおかげで壁にもたれ込んだけど、ああ助かつたんだなどどこか客観視している自分がいた。

コントロールが苦手な自分とは違い、少女はそれに長けていた。ごろつき達は少女に恐れをなしたのか、すぐに逃げに走る。

無様な姿をさらしながら捨て台詞を吐いてどこかへ行つた。

「大丈夫だったかしら？」

呆然と見送つていた俺のすぐ近くに来ていた少女は先程の冷たい微笑みではなく温かみのある微笑みをしていた。緋色だと思っていた目は髪と同じ茶色だった。

あれは見間違いだったのだろうか。

いやでも、そんな事はどうだって良かつた。

一目惚れなんてしないだろ、と友人に吹聴してた自分が恥ずかしかつた。

青年の名はアーディア・クレズメント。

たぶん剣を腰に下げるから職業は剣士。

ウルフヘアーのようなディープブルーの髪はストレートではあるが、頭頂部ではねておらず、全体的に重力に負けて落ちている。

少し天パが入ってる私の髪と比べて凄く羨ましいと思う。

垂れ目がちな空色の目がちらちらとこちらを見てくるのが分かる。

第一印象は青い、第二印象は好青年。

長く尖った耳はエルフなのだろうか？

少し中性的とはいえ、顔や体つきからして男らしく、間違つても女とは思わないだろう。

そこまでおしゃべりとこつ訳ではないらしく、たまに話しかけてくる程度の会話。

それにして久しづりにゆづくりと「飯を食べれた気がする。

あの一週間、近くに一哉君がいても堅苦しい食事だったからね。

向けられるねちねちした視線つてさ、もう何年も浴びてる私からすればどうでも良いわけよ。

ただ食事中ぐらい一哉君を自由にしてやれよつて遠回しに一度言つただけで毎晩嫌がらせをしてくるつて事は私の存在は邪魔だと仰りたい訳ですかー、と。

……じゃなきや私を海に突き落さないか。

どうせあの聖女様だから、自分の事を良いよつて言つてるだろ？

一哉君と行動を共にするのは私の精神的な意味でようしくないな。

「レイは一人で旅をしているのか？」

「旅らしい事なんてしてないわ。昨日嵐に巻き込まれて漂流してき

ただけだし」

「すうじい強運だな……。あればリヴァイアサンの嵐だつたの」「

あの嵐で大海原を渡る船を壊して丸」と飲み込む、とはさすがに行き過ぎだと思つけど。

他にも複数体目撃されているがそれぞれ独立して生活している為にそれほど脅威でもないらしい。

けどこいつた他大陸との貿易を盛んに行つてゐる場所では一体いるだけで大きな損失を生み出す。

そういうやあのスタン、最初は止められていたのにこいつの間にか退治する話出てたけど何したんだろう?

脅し?いやいや、リヴァイアサン倒したくて脅すつてビうなのよ。

「せういえば、今日リヴァイアサンが討伐されたつて話聞いたか?」「ええ聞いてるわ。実際にあの場にいたし」

「いたの!?……もしかしてさ、嵐に巻き込まれた腹いせ?」

「あなたは私の事をそんな風に思つていたのね、心外だわ」

「冗談!冗談だから怒るなつて!」

「知つてゐる」

「なんだ……」

それにしてもよく表情の変わる人だな。

興味深そうだったのが一気に焦りに変わり、分かつた途端にほつと一安心するような表情。

別に本音聞かなくても問題ないぐらい?

まあこいつが何やらかそつが、たつきのじゆつときの良い牽制になつてるだらうし。

それにはう……なんか憎めない。

うん、これに限るね。

一室だけしか空いてなかつたから同室だけど、宿泊費も払つてもらつちやつたし。

「あのひ、ギルドに所属しないなら一緒にやらないか？」

「いいわよ」

「いやあの無理にとは言わな……本当か！？」

「ええ」

「早速明日、ギルドの登録に行こう！……あ、やつぱギルドの人に紹介状書いてもらつた方が良いのかな……」

「どうして？」

「ギルドを新しく作る時に、最低でも設立から一年経つているギルドの人に紹介状を書いてもらつと優遇してくれるんだよ」

『うつてつけ人がいるじゃないですか』

『……まあ良いか』

ギルド設立の紹介状がお礼なのは少し気に食わないけど。たぶん、この街のどこかの宿屋に泊まってるはずだから、夜の内にフェルマーに頼んで探してもらおう。

『つて事で、ディアボロスの斧伝いにあいつに伝言をお願いね』

『御意に』

「誰か知つてる人いないか？」

「いるわよ。スタンインって人」

「そうだよな、いないよな……つているのかよ！しかもスタンインって、あのスタンイン・アルフォード！？」

戦珠持ちでギルド歴三十年のベテランだつたらまあ有名だらうな。

陽もすつかり昇つた頃。

スタインに会うべく、彼が泊まっていた酒場兼宿屋に入る。仲間達と談笑して待っていたスタインがこちらに気付くと、仲間達は空気を読んで席から離れていく。

「よお、昨日ぶりだな」

「そうね。夜の内に伝達がいつてると思つんだけど」

「こいつから聞いてるぜ。ギルドをやりてえんだって？」

こいつ、と言つて戦珠を軽く叩きながら、スタインはこいつしながらアデイアと私を見比べた。

あーもう、そういう方面じゃないんだけビ。

「良いぜ、紹介状書いてやるよ」

「昨日のお礼はこれでいいわよ」

「そうか？ だつたらはりきつて紹介しなきや、礼に合わねえな」

「よひしくね」

スタインは近くにいたメンバーの一人に紙とペンを寄越すように言うと、すらすらとあの英語に似た文字を書いていく。待つている間、喉の渴きを潤すべくウロイトレスに水を頼んで彼と同じ席にアデイアと共に着く。

どうして紹介状が必要なのか。

それはひとえに、ギルドという存在がこの世界の生活に殆ど密着している事から成り立つている。

討伐ギルドから鍛冶ギルド、商人ギルド、果てには料理やら占いだとか、私と一哉君の世界にもいたように、それぞれの専門を商売に使っているギルドが多い。

言つてしまえば、そんだけあるなら新米野郎は元あるギルドに入つたほうが収入が安定されるという事だ。

同時に社会経験も積める辺り、何処となく会社と似てる。

ギルドを設立する人は、ある程度の社会経験を積んだ者が独立するか、若くして自ら道を切り拓きたくてつていうぐらいだろう。

そして、その紹介状をどうするのかと言つと、”セントラル・ドグマ王の玉魔”というギルドの管理をしているギルドに渡し、登録する際に紹介状を渡せば様々な特典がもらえる。

登録しなくても平氣らしきけど、その場合は自分達から売り込みに行つて仕事をもらわなきゃいけない。

この”セントラル・ドグマ王の玉魔”に頼めば仲介料として報酬金の一割は取られるがわざわざ売り込みにいかなくても仕事がもらえる。

とにかく仕事の幅を広がせたいが為に、ギルドはこそつて新米達を勧誘するんだと。

だからギルドに入りたいて思つてる人も、”セントラル・ドグマ王の玉魔”にギルド未所属として登録しておけばありがた〜く簡単に就職につける。良いよねえ、元の世界じゃ就職氷河期なんて揶揄されて業種すら選んでる暇ないんだから。

ちなみに紹介状があれば優遇してもらえる内容は、それなりに力がある事を周りに示せて、ランクの高い依頼も受けられる事なんだと。拠点地ホームと言われるものは相当じゃないともらえないらしいけど。

「待たせたな。これがそのお礼だ」

「どうもありがとう」

「おうよ。これからおめえらの活躍を期待してるぜ」

白い封筒に入れられ、蝶で封のされた紹介状を手に席を立つ。テーブルに空になつたグラスとコインを置き、スタインに軽く挨拶してから宿屋から出た。

『紹介状の内容を確認し、妙な記載があつたら言いなさい』

『御意に』

「じゃあ紹介状ももらつたし、首都に行くか！」

「どうして？」「

「ファンネスの首都だつたら、王の玉魔セントラル・ドグマ」の支部があるんだよ。そこで登録できる」

「この街にはないの？」

「管理するのも大変つて事つらしげ？まあ良い訓練になるんだし、のんびり歩いていい」

「はあっー。」

横薙ぎに振るつた剣がブチウルフの体を真つ一いつに斬りさく。
すぐさま他の敵に目標を決めて斬りに掛かつていくおかげで私の仕事は殆ど魔術で拘束させるぐらい。

正直ありがたいと言つてしまえばありがたい。
なんせ楽だからね。

五体いたブチウルフをものの数分で片付け終わり、素材を剥ぎ取つていいくアディアに近付く。

「これでブチウルフの牙が一十九本、毛皮が十八枚つて所か」「合成に使うの？」

「それもあるけど、大半は売るかなあ」

地方都市ベルルカから歩き始めて三日が過ぎた。

徒歩で早ければ四日で到着できるらしいのだが、どうにも魔物とのエンカウントを楽しんでる所為で五日は掛かりそうだ。

「なあ、次から戦闘は任せて良いか？」

「どこか怪我したの？」

「うん、疲れた」

にへり、と笑いながら言つているが、全然疲れているように見えない。

まあ存分にアディアの剣技は見せてもらつたんだし、こつちもお返ししなきゃ悪いよな。

「これでも共にギルドをやつしていく仲間なんだし。

「良いわよ、後ろで休んでも

「おう。お前の背中ぐらいで守つてやるよ」

「それは結構な事で」

『前方から五体のブチウルフが向かってきます』

『了解』

右手に魔力を溜め込み、ブチウルフが見えてきた辺りで地面に向かつて掌を押し付ける。

幾何学模様 紫色の術式陣が光を放ちながら広がる。

二メートル程の大きい黒い狗が一體、術式から飛び出して真っ先にブチウルフへと向かつていく。

あまりに大きな敵が現れた事に、ブチウルフ達は恐れをなして逃げ出した！

……やべ、やりすぎたなこりや。

戻ってきた一體の狗はそのまま消える事なく目の前で伏せをしていた。

「クウン……」

「グルルル……」

「なあ、そいつらに乗つて首都まで行つちゃいけないのか？」

指を指されても全く反応を示さない狗一體。

生物の体を模していくも、意志は薄いのだろうか。

ある程度の動き以外は私の命令どおりに動くだけだし。

「素材集まらなくともいい？」

「やっぱ歩いて行くかー」

ぱん、と手を呂くと風にせりわれぬ砂のようだ運えていった。

五田田のたぶん三時のおやつぐらいの時に漸く辿り着いた首都の景色は遠目から見ても美しかった。

中心部から街の隅々まで流れるように行き渡る水と
白い建物が光
を反射して輝いているように見える。

足を動かす。
セントラル・ドグマ

支部まで無事たどり着けた。

「なー名前どうするー？」

「適当にも程があるだろー。」

「何それ下ネタみたいだから却下！」

「名前に『マリ』とマシを入れないよつて却下ー。」

「ガッ
つて何の話だよ！！」

おおッ!! すげー!!

「……………」

「お疲れ」

「じゃあ
”銀瑠璃の遊星
”で

「お、おお…… まともなのが出てきたな」

「けつてーい」

「やつとか」

すぐさま、ギルド登録用紙とスタインの紹介状を受付嬢に渡す。スタイン、疑つてはじめんなさい。

「スタイン様のご紹介ですね。拠点地を作ることが可能ですが、いかが致しましょう。」

まあ家みたいなものだらう、ホームって読んでる。この土地で仕事をしていくんだつたら宿屋で泊まるより作つてしまひた方が良いだろ。ふらふらと旅をするんなら、宿屋だけで良こと理解されビ。

「どうする?」

「なあ……どうよつか」

「作つておいても損はないですよ。この街は観光都市として有名ですし、皇帝様のお膝元ですし」

「だとよ」

「それに、若いお二人のこれから的生活にぴったりの街かと

またか、またこの勘違いきたわこれ。

これも利用すべき材料なのかな、とりあえず一芝面売つておい。アディアの腕に絡めるように抱きついて、幸せそうな笑顔を貼り付ける。

「あら、何か付けてくださいの?」

「とても良い物件があるんですよ。ちょっと待つてこてくださいね」

奥へと引っ込んだいったのを確認すると、アーティアが慌てたように小声で話しかけてくる。

「（ひょり、ひょりと）どうしたんだよ？」
「（ここ）で恋人の振りをしておけば何か良い事あるかもしないじゃない」

「（マジで）言ひてね？」

「（言ひてる）」

タイミングを読んだかのように颯爽と帰ってきた受付嬢の手には一枚のB5サイズよりも少し小さい紙があった。

「お待たせしました。街の中心部から少しそれではいるんですが、メインストリートの近くなので生活には不自由ないかと」

どうやら見取り図ではなく、その拠点地までの道のりが描かれた地図だったようだ。

その近くには食材屋、鍛冶、武器・防具屋、アイテム屋など色々な店舗が構えられている。

確かに生活には不自由ないけど、ここまで良いこと何か裏があつそうだ。

「なんでこんな良い所なんだ？」

「あ、それはですね……」

お化けがいるのか、老朽化が進んでるのか。

結局受付嬢は行ってみれば分かります、とだけ言つとそれ以上何も言わなかつた。

お金はいらないと言われたから、貸家でもローンを組んで払つものでもないらしい。

「見た目は他の家と変わらないみたいだけど」

「扉を開けると中にはびっしりと『ギ

「よし逝つてこい」

「ちよ、まつ!」めんまじーめん「冗談だから上めで!」

「十時間ぐらいお風呂に入つた後なら抱きしめてあげるから」

「何それ複雑！」

『びつしりとは居ませんが、巨大なのが居

最後の馬鹿力を振り絞り、扉を一気に開けてアーティアの背中を魔術で押し込んで閉める。

せめてもの、バサンぐらいは焚いといてやるよ。
こうして私は拠点地に仲間という生贊を捧げた。

『で、結局は本当に普通の拠点地ホームだつたと』

『冗談でもあんな事言わない方が身の為よ、フホルマー』

窓から姿を現し、問題ないと伝えてきたアーティアに驚いて魔術を放ちそうになつたのは言えなかつた。

いざ入つてみれば新築のかリフォームしたてなのか、中は綺麗に整頓され、シンプルにも家具が置いてあるぐらい。

バスとトイレは別、水道は通つてているようだが、電気とガスはどうなつてるのか分からなかつた。

なんかそういう魔法道具でも使つてるんかね。

冷蔵庫みたいなものもあつたし。

二階建ての拠点地ホームを一通り見た後には既に夕焼け空が見えていた為、仕事は明日から。

そのため、近くにあつた酒場で夕飯を取る事にした。

……といつか、アレだ。

「どうして獣耳少女が私の元に来ない」

「知るか！」

「あ、あ、あんな耳とか尻尾とかふつそらせで抱き心地良さそうじやない！」

「お前さ、会つた時よりキャラ崩れてないか？」

「確かに」

「認めんのかい！……つかいきなりだな」

「初めての依頼で獣耳少女に会えますように」

「聞けよ」

その時、遠くの方で瓶が割れる音、床に何かが叩きつけられるような鈍い音がした。

一体何事かと、野次馬達が立ち上がりてそつちに目を向ける始める。アディアも気になつて立ち上がり見ていた。

どうせ野郎共の下らない喧嘩だろつ。

「テメエ……ふざけた事抜かしてんじゃねえぞ！！」

「誰がふざけてるつて！？アンタがやつた事はあいつの威信が掛かってんだよ！！」

「ああ！？おー、この女やつちまえ！！」

つて女かよ。

随分と勝ち気な人ですこと。

……この皇帝のお膝元だよね。

ちょっとメインストリートから外れてるとはい、首都だしこういうのは酒場を経営する人にとって迷惑なんでない？

と思つたらオーナーらしき人はノリノリで女性を応援してた。

え？あー……実は嫌な客で、排除するのにうつてつけだつたとかかも。

だつたらあの人はどこかのギルド所属の方で、依頼として受けたからその嫌な客を挑発したとかかな。

こういう妄想とか好きだわー。

「おいレイ、あいつやばいぞ」

「そんなに心配なら助けに行けばいいじゃない」

「うえ？お、俺が？」

「何かダメな理由でもあるの？」

それから立ち上がりつたきり、あーだのうーだの唸り出したアディアに、何があつたと推測。

大方、街中で暴れたら半壊させたか、怪我人を出しちゃつて止めに入るのも苦手になつたとか。

もしそうなら、あの時私でもやつつける事ができた『じりつき』に絡まれてたつていうのもあり得そう。

そんな妄想もとい推測語りをやつていると、女性が段々押される状況になつていた。

人影の隙間から見えた獸耳が つて、ん？あ、アレは……！？

「どうした？」

「一分で決着をせんわ」

「は？……え？と、いつてらうしゃい？」

「いつてくる」

呆然と見ているだけだつたアーディアを席に付かせ、一人群集の中に割り込んでいく。

微妙に魔力を使って搔き分け着いた先では、開けた空間で女性は果敢にも男五人と暴れていた。

『やつぱりあの人獸耳だわ……！』

『動機が不純すぎやしませんか』

『気にしたら負けよ』

ノースリーブの襟が付いた白色の上着は足元まで裾があり、ひらひらと舞わせながら身軽そうに動いていく。

頭頂部では耳がぴくぴくと動き、それが事前に相手の動きを察知しているようだつた。

一人の男がこちちらに気付くと、田標をあの女性から切り替えて向かつてきた。

あつちじや敵わないから、仲間と見たこのひ弱そうな女をやつちま

おうつて考えかな。

あは、安直一。

「うううあああ！ があつ！？」

下から急速に現れた闇の腕（魔力を込めれば結構怪力になる魔術）がアッパーするように男の頸にクリーンヒットした。結構な一撃を喰らった男は白目を向いて背中から倒れ込む。はい一人撃破。

「なんだ？ テメエもあの仲間か？」
「げへへへ……結構イイ女じやねえか」
「アンタ！ 危ないから下がつてな！！」
「余所見してんじやねえ、よつ！…！」
「ちつ」

二手に別れた辺りで、女性がこちらの存在に気付いた。こちらを見向きする程余裕はありそうだが、まあこのまま暴れられちゃゆつくりご飯も食べられないんだし。

注文したすぐ後にこんな事になるんだから、迷惑だつつの。

「準備は良い げふつ！」
「おいお前な あぶつ！」

さつきと同じ手法でつていうのは少し物足りない為、足を引っ掛けて背中から倒れるように仕向ける。

二人とも背中を打つて痛みに悶える間、最近よく使つ機会の多い拘束魔術で蓑虫のようになつてもらつた。

続けて魔力でエアーガンを創造し、少し威力を強めて、女性に向かつしていく男に放つ。

良い具合に当たつて倒れ込んだ男を見た、もう一人の男がそこで初めて自分だけだという事に気付いた。

露出されていた肩を狙つたが、血は出でない筈だ。

エアーガンを男に向けながら近付き、確認すれば青くなつてたから問題ないだろ？

「出でいきなセー」

「「「、ンンンン」」めんなさい……、今すぐ出でいきます……」

仲間を見捨てるような事はせず、肩を負傷した男を支えるように出口へと向かつていぐ。

蓑虫状態の男達も解放し、気絶した男を連れて五人は酒場から出て行つた。

乱闘が終われば、呆氣なく席に戻つていく野次馬達をオーナーは引きとめ、片付けさせる。

常連だからこそ出来る事なんだろうけど。

創造させたエアーガンを霧散させ、片付ける事なく席へと戻れば、アディアが目を輝かせていた。

「やつぱレイははす」」いな！」

「そりやどうも」

「アンタ、レイつて言ひつか？」

「ええ。あなたは？」

「私はミツア。ミツア・ローマンセ」

いつの間にか近くにいたミリアは、そのまま流れるよつて同じ席に着いた。

『ついにキタ――――――』の際成人女性でも良い！獸耳キタ――――――』

『珍しくテンション高いですね……』

フェルマーも珍しくドン引きしていた。
これでポーカーフェイスだというのだから驚きである。

「さつきはどうしてあんな事になつたんだ？」
「実はアイツら、知り合いのギルドの奴だつたんだけど」
「ああ、それで。なにかやらかしたのね？」
「私じゃない！……いきなり怒鳴つてごめん」
「構わないわよ」

護送の依頼をやつてたんだけど、依頼人が寝ている間にこつそりと運搬品を盗んだんだと。

それが金品だつたが依頼人にバレて自棄酒して愚痴程度に零してたら、リーダーと知り合いのミリアはたまたま酒場にいて、つい聞こえてしまつた言葉に反応して血が昇つてあんな乱闘になつた、と。まああれだよな、馬鹿だよな。

ミリアはミリアで沸点が低い。

美人さんなのに惜しいわー。

「ミリアはどこかのギルドに所属していないのか？」

「しない」

「じゃあウチに来ないか？お前強そうだし」

「えつ？」

『あ、なんかフラグ立つた』

『天然タラシと勘違い、ですか』

『異種交配つていけんのかな』

『いけるのではないでしょうか』

アディアの交渉により、結果ミリアは我ら”銀瑠璃の遊星”^{ラズリ・ステラ}に加入了。

ひやつほーいもふもふだー。

「ミリアは接近戦が得意なのか？」

「ああ。大剣を使う」

「すごいな、俺は細剣だから尊敬するよ」

うふふあはは、と良い雰囲気の一人を見てたら、私の腹から甘い砂が逆戻りしてきやうだ。

『なんてことなの……私はぼっちになる運命らしいわ』

『御主人、私がいつまでもお傍におります故、お気を確かに…』

なんか虚しくなってきたわ。

そろそろ日付跨ぐんだけど、風呂入りたい寝たい。

え？ フラグ？ 圧し折るよ？

だって空氣読むとか、面倒だしそれで精神すり減らせるのは無駄だし。

「ほらおー一人さん、帰るわよー」

一部修正しました。

あいつはいつでも現状を楽しんでいた。

幼い時から冷静さを兼ね備え、そして自分が最大限楽しめるルートを最短で見つける。

何かを経験していたかのように、あいつは同年代の自分達が見ても大人のようで子供のような人間だった。

「今回は”はちきゅーさん”に追われるのかしら?」

「！ つて、玲か……。なんだよ”はちきゅーさん”って。あと、誤解だからな。向こうが勝手に近寄つてきただけだし」

当時高校一年生、花の高校生、青春真っ只中。

裏道に入つて迷わせようと、曲がり道の多い場所に入つた時にはいつももう民家の壁に腰掛けっていた。
坂道でもあり、下ろうとしていた時で、あいつは見晴らしのいい場所で見物を決め込もうとしていたんだろう。
意地汚い。

少しは幼馴染を助けてくれたつていいだらう。

「まあまあ。一哉君、お茶でもしてく?」

「……そうだな、そうする」

背丈以上あつた塀を乗り越え、住んでいるであろう誰かさんに心中でお邪魔しまーすと声を掛けておく。
意外にも庭から見た塀は高く、静かにしていればやり過ごせそうだつた。

縁側に腰掛け、玲から渡された暖かい緑茶を一口飲めば心が落ち着

く。

「おい、あのハーフどこ行きやがった」

「それがこの裏道に入ったのは見えたんですが、……」

「馬鹿野郎が！－なに見逃してやがる－－！」

「す、すいやせん！－！」

「ここの出口全部塞げ！蜂の巣にしてやる」

「誰の家だか知らないが、ここの一泊するのほんが引けるところもんだ。」

「やっぱ蹴散らしてくしかないのだろ？」

「緑茶を飲み干し、うんうん唸るように悩んでいた俺に、玲はまたしても救いの手を差し伸べてくれた。」

「ここの家は私の祖父の家でね、玄関は表通りに面しているのよ」

「しかしこの幼馴染、無償で俺を助けた事など無い。」

「何かしらの条件が付いてくるが、それを提示してきた事も無い。つまり、玄関から出た後に何かがあると。」

玲の目が怪しく皿を細め、口元が歪む。

「あなたなら簡単でしょ？…だって羨ましいぐらい出来る人だもの」

「いつか言っていた台詞を思い出す。」

「今は目の前で文字の勉強をしていくので、一日で一気に単語から長つたらしい文章まで進んでいた。」

「つくづくここのつは俺よりも頭が良いんじゃないかと思うが、それは断じて俺自身が許さない。」

「完璧だと、天才だと謳われている俺はここのつに絶対負けてはいけない。」

い。

こいつの目標が俺だと分かっているからだ。

主人公が俺ならば、こいつは影の主人公だ。

決して主人公とは行動しない、陰で支える影の主人公。

魔力の測定時、レニアは俺より魔力は低いが炎属性を持っていると言った。

だが俺が手にした聖剣ディアマンテは、玲が幻術を使って誤魔化していると伝えてきた。

オールラウンドに何でもこなせる俺とは違い、膨大な魔力を持ち、且つ既に使いこなせていると言ってきた。

初めて負けたかもしれない。

質も量も桁違いだと。

そして玲は、やはり俺と正反対の闇属性だった。

「そういうえば一哉君、お勉強は平氣なのかしら？」

「少しごらりサボつたつて良いだろ」

「あらあら、無遅刻無欠席な優等生さんがそんなこと言つて良いの？」

「はっ。あいつらもどうせ俺の外見しか見えてねえ。甘い言葉でも一言言つてやるだけであいつらは馬鹿みたいに騒ぐ

外見だけ見てきやーきやー騒ぐ甲高い声が大嫌いだった。

優しく微笑みかければすぐに騙される馬鹿を相手にするのが面倒だった。

そんな俺を分かつて、玲は何も言わずにこの図書室に匿ってくれていた。

ディアマンテに言われて分かつた事は、図書室全体に幻術を掛けている事。

きっとこいつは、俺がどういう理由でこいつに来るかを分かつてい

たのだろう。

唯一、友人の中で気を許せる存在でもあった。

「ふうん……所でさ、聖女様に元の世界に帰れるかどうか聞いた？」

「あ？アレが易々帰してくれると思うか？」

「まさか。で？」

「膨大な魔力を消費するから、一いつの月が満ちたりて重なる時に帰せるだとよ」

この世界は月が二つある。

一つは小さく、地球の時のように一ヶ月かけて満ち欠けを繰り返し、毎晩のように見られる普通の月。

もう一つの月は大きい為、三年を掛けて惑星の周りを一周する。

満月と満月が重なる時、たつた数時間だけこの惑星は魔力に満ち溢れるのだが……。

元より呼び寄せるだけで帰すつもりなど毛頭ないだろう。

それにある女なら、あわよくば俺と結婚する事も考えているはずだ。純真な乙女も、結局は女だ。

「私達がこの世界で最初に見た部屋、覚えてる？」

「ああ」

「一昨日行つたら、床には術式が浮かび上がつていたわ。昨日行つたらもうなくなつていたけど」

「さすがに消え」

「違うわ」

術式は発動されるアクションまで補助するだけのものだ。つまり発動されたらすぐに消える。

俺自身も魔術の訓練はしているから過程は分かる。

酷く魔力の消費する術だったら、しばらくは残るらしいが。

眉間に皺が寄るのを感じながら、俺はペンを走らせるのを止めた玲を見た。

「術式を解析したら、あれはあちらの世界を繋ぐ道になつていたわ」

「じゃあ俺達は帰らうと思えば帰る事が出来るのか……？」

「帰れたわよーそりや。でも誰かが意図的に消しちゃつたから、私達は自力で帰るしかないの」

指を組んで、顎を乗せながらこつものよつて田を細め、口元を歪ませて笑つた。

その笑い方は酷くイラついていて、この現状を楽しもつとして、そしてその”誰か”を突き止めていてビクしてやるうかと考えている。あの時もそうだった。

彼女は俺に、あのチンピラジモをビクにかしろと田で語つていた。全員を縛り上げた後、タイミング良く来た警察はきっと彼女が呼んだものだろう。

そのあと別件で追つていた犯人と一致し、警察署から書状を貰い、また有名になる。

彼女はそれでイララを解消したというのだろうか？

それは本人しか知らないし知る気もないが。

「残念だけど、私だけでは魔力不足でね……何か魔力を補うものを探し出してくれたら帰れるわよ」

そう言つて彼女は深紅の色をした本のあるページを開いてこひらに見せながらそう言つた。

描かれていたのは術式陣で、細部に亘るまでみっちり記載されている。

これがその帰れる唯一の手段なのだろうか。
それでもすぐに帰れる訳ではない。

浦島太郎のような事になるかもしない。
最悪その術式すら発動できないまま、俺達はこの世界に閉じ込められるかもしない。

「あなたなら簡単でしょ？だって羨ましいぐらい出来る人だもの」
だというのに彼女はこの現状を楽しみ、大いに前向きで、そして物凄く他人事だつた。

補完のようすで補完になつてないつていう。.

まずは手ごろな依頼を個々で受けていこうとこう話になり、まあさくっと三つ纏めて終わらせてきた。

支部の中の依頼受付窓口（なんか市役所みたい）でさくっと完了の手続きを終わらせても一人はまだ戻つてこなさそうだった。受付の人にオススメの場所はどこかないと聞けば、帝立図書館と言つてきた。

まさか言葉に被せて答えてくるとは思わなかつたけど。

なんでも様々な文化が合わさつた帝国だから色々な蔵書が收められていて世界一を誇る図書館なんだと。

それはそれは良いヒントが落ちてそうで。

ついでに一人が依頼から戻つてきた時の為に、伝言の手紙を渡してほしいと頼んでおいたから問題ない。

外観はパルテノン神殿のような建物でとても立派。

扉も日本人な私からしてみればとても大きく身長の倍以上の物だが、この世界では寧ろ普通と言つて良い。

大きな扉を抜けて中に入つていけば、まず目に入るのは背の高い本棚。

二階建てのようだが、天井の高さを強調する為に二階部分は壁に沿うように、中心部を開けて設計されていた。

その一階中心部、私の目の前には真ん中が抜けた円卓があり、本の貸し出しをここでやつているようだ。

ざつと見回しても圧倒的な景観には驚きを隠せない。

魔術関連の本を大体抜いて、近くの椅子に腰を掛けた。

「レイ様とミリア様から伝言のお手紙が

「あの一人もう終わらせたのか？」

「ええ。レイ様は確か昼過ぎに、ミリア様がそれから少し後でしょ

うか

「あー……」

なんとも氣の抜けた声が自分から出た。

受付嬢から一通の手紙を受け取る。

本当に伝言のためだけらしく、一ひとつとも簡単に折りたたまれているだけだった。

すぐに受付から離れて中身を読む。

「レイは図書館だつて？ミリアは拠点地、と……」

なんだつて図書館にいるんだろうか。

とりあえず、ミリアは既に今日の夕飯分を買っておくといつ事も書いてあるので助かる。

酒場で食べてたら勿体無いし、どうせキッチンがあるのでなら、と朝そう決めたからである。

作るの俺らしいけど。

「そういう最近じゃ夜になると盗賊が出るんだつて？」

「ああ、オレもやられたよ。いつの間にか財布をスられてるんだからな」

盗賊……？

既に辺りは薄暗い。

レイは一応俺を助けてくれた少女だけど、まだまだいたいけな少女でもある。

ミリアは既に拠点地にいるから、とりあえずレイを迎えて行くべき

だろう。

今度は柄の悪い奴に捕まらないよう、気をつけながら図書館のある方へ急いで向かつた。

すれ違ひになるかもしれないから余計だつた。

本を読みながらフェルマーの書の空白ページに彼と共に、ああでもないこうでもないと言いながら術式を書いていく。

基本的に時間の概念を忘れるほどの集中力を持ち合わせていない為、自然と書の隅には術式とは違う落書きも混じつていいく。

ついでに言つと魔導書だけでなく、この世界で大人気の英雄伝を読んだり、料理本に手を付けたり。

完全に日が暮れた頃には殆ど人がいなかつた。

お迎えが来ない辺り、どうも伝言のアレは無意味だつたようだ。

まあ夕飯を食べるのに会話する機会はあるだろうからその時で良いか。

全ての本を片付けるのはさすがに無理があつたので受付の人に任せるとする。

蒼い制服に身を包む金髪の美人なお姉さんは眼福モノだと思います。そんな人に任せるなら自力でやつた方が、と思つていたら。

「便利な魔法具があるので大丈夫ですよ」

「おお……さすが首都。

首都で何があるかなんて分からぬけどとりあえず凄い魔法具があるからお姉さんの手は煩わせないで済むらしい。

「……」「このうちに出でる予定でしたら図書カードを作りますか？」

「じゃあお願いします」

「はい、ではこの魔珠に触れてください」

出た、魔力測定時にそんな名前を聞いたぞ。

と思つたらこれは魔力の波長で個人を特定して管理しているらしい。この波長というのは一人一人違つらしく、まあDNAと一緒に少し似ていても僅かに違う場所があつて、それで判断できると。まあ一々波長なんて調べてたら利用者の負担は大きいらしく、この時だけ触れさせて特殊なカードを作るんだ。

「レイ様の『登録、完了致しました！』ではまたの『利用をお待ちしております』

手渡されたのは元の世界でも使つていたキャッシュカードと同じぐらいのサイズ。

半透明でありながらしっかりとした材質で、とても魔珠の中から出てきたとは思えない。

本当、あれどういう仕組みなんだ？

早速フェルマーの書の適当なページに挟み、フェルマーの部屋（と
いう名の異次元空間）に保管してもらひ。

「レイ……ああ良かつた、無事？」

いきなりの事でいまいち状況が理解できないが、とりあえずアディアが迎えに来たという事は分かつた。

なんで肩とか腕とか触つて怪我していなかの確認を取るのかまでは分からなかつたけど。

「どうしたの？」

「最近盗賊が出来つて聞いて迎えに来た」

盗賊つて変質者の類？

ああでもやつこいつのつてビリーハモーるんだね。

「それはどうも」

「うん、本当に合ひてよかつた」

なんというかや、アーティアってへたれキャラだと思ってたわけよ。
『ごろつきの件で思い切り先入観抱いてて悪いんだけど。

こう、ね。

だらしないって言つたら失礼だけど、にへらつて笑う顔が更にへた
れ感アップつていうか。

腹を出したデザインの服を着て立派な腹筋を揉められ
ているからか、中性的な顔とはいえ女だと思わないけど。
かと言つて男にも見えないんだけどね、さすが中性。

肌寒い空氣に鳥肌が出てきた。

「その服で寒くないの？」

「そうか？まあ竜人族は基本的に体温が高いから

え、じゃあエルフの耳はどうなんの？

01 (前書き)

いつの間にかユニーク2'000 PV12'000突破してました。

凄いのかよく分かりませんけどこれだけ読んでくれる方がいてくれるところの小説もそこそこ面し「

調子に乗る投稿者ですが、色々な方にありがとうございます!!

「レイ・カゲミヤ、あなたを国家反逆罪で捕られます」

都会のような人混みがある首都クリスタル・パレスのメインストリートは今、私がこの世界で最も嫌う人間代表によつて説教になつていた。

つて言つたら凄い他人事よね、私

周囲を取り逃がさないように衛兵達で囲い、何も感じさせない目でこちらを見てくる聖女様と対峙していた。

まさか街中でこんな事言われるなんて思いませんでしたけど

「おこレイ、お前何やつたんだ？」

「さあ？なんの罪でしじうね？全く記憶がござりませんよ」

声高に民衆の前で宣言した聖女様は、返事の言葉が気に喰わなかつたらしく眉をしかめている。

別に良いわよー？捕まつても逃げる自信はあるから。

でもアーディアとニアを巻き込むのはいけ好かないわね。

「あなたは勇者としての義務を放棄している、それだけで充分な命令違反となります。どうしてすぐにでも我々と合流しようと思わなかつたのですか？」

あああれだね、これはやられた。

一哉君しか言葉が分からなかつた時、こいつの親父と面会した時に何か言われていたのか。

しくつたな、私にも寄越せぐらい言つておくべきだったか。
まあでも、突き飛ばしたのあなたですかね。

「もう一度と近寄らないで下をこまし…って事だら?

「お言葉ですが、私は命令を聞いた覚えが無いのですが」

「私の父と謁見した時にあなたもいたでしょ? その時命令が下されたはずです」

「いましたつけ?」

「いましたわ!…」

それに今私が出来る事はこの場で自分の情報を漏らさない事だ。
こんな所で弁解とかしたくないんだけど

然るべきところで話してあげるから、早く連れて行きなさいっての。

「～～～もういいですわ!…」の女を早く連れていきなさい!…

「はっ! この一人も共に連れて行きましょうか?」

「連れて行きなさい」

はあ? と呆れた溜め息が出てくるのをなんとか堪え、衛兵のさるがままにされておく。

不機嫌そうだった聖女様の顔がいきなり機嫌顔になる。

「その方達に、この女の正体を教えて差し上げましょ?」

あ、こいつ反省しないなって思った瞬間だった。

正直言つて首都に来て一ヶ月が経り、ようやく一哉君と会える手綱がぶら下がってきたなと思っていた。

私が上陸したベルルカには一哉君達の姿が無かつたから、違う港町に到着したとしてもこの皇帝のお膝元にいればいつかは世界を巡る上でここに来るんじゃないかとは思っていた。

世界最大と謳われるニーザー・ナ大陸のどこかには、哉君達がいるつて事だし。

ああこの期間で時空間系の術式を煮詰められたのは良かつた事かな。

「レイは本当に勇者なのか？」

「……あなたはその話、どこまで知ってるかしら？」

「んー？魔王を倒す力を持つ人間、って所かな」

「ミリアは？」

「興味ない」

「うう」

やけにぱっさりと切るような返答なのがミリアらしいとも思つ。現在護送車にてクリスタル・パレスからどこかへと運ばれている途中。

がたがたと揺れる護送車の壁に凭れかかりながら、僅かな光が入る天井付近の窓を見る。

捕まる前に毎回はんを食べてきたから空腹感はないけど、揺れる護送車のおかげで吐きそうだ。

「私はレイが好きだ」

いきなりの告白！？あれ、いつフラグ立てましたつけ。

私はバイでもレズでもないぞ、そうノーマル。

可愛いと美人は正義だ、とありきたりな台詞は言わせていただくけど。

「たとえレイが何者でも、私は傍を離れるつもりはないから

頬を撫でるよつとして手を添えたミリアの表情は心配そうなものだつた。

もしかして、さつきの正体がつて聞いた辺りで私が彼女達から離れると思ったのかな。

気持ち悪くて顔真っ青だから余計勘違いさせたか？
とりあえずミリアの頭を撫でておいた。

「ありがとう」

「ふい」と顔を背けられた。

なんだ？お礼言われ慣れてないのか？つい奴よの。お。

使い道違うか。

「俺も離れる気はないよ。離れようとするなら追いかけてやる」

「……それはどうも」

「たれから男前にレベルアップした！つてレベルアップ早い！」

なんだか身の危険も感じるような台詞ではあるが、一人からの愛の告白は素直に受け取つておくとしよう。

好意を受け取つても嫌ではないしね。

行き過ぎた好意は勘弁したいところですが。

『命の危機とあらば、私はあなた様のために身を粉にしてお護りします』

『その時が来ないよう祈つてるけど、そうなつたら死ない（？）程度によろしくね』

ついには三人目からの愛の告白まで受け取つてしまつた。

いや、フェルマーは最初から全身全靈で愛の告白をしていたな。

……あれ？していたつけ。

仲間になつてからそんな経つてないつていうのに、なんだつてこん

な慕つてくれてるんだろ。

人徳のおかげ？まあ私も君ら好きだよ。

とりあえずうえっぷ、吐きそうだ。

どうにかならないのかこの護送車。

罪人を運ぶのに護送車であつてたかな…（汗）

お久しぶりです、生きてます。

更新したのが随分前に感じますね、皆さんは元気に過ごされている
でしょうか。

作者は文章書かずにウハウハしながらゲームしてましたごめんなさ
い

吐き気と気持ち悪いのと頭痛と格闘し始めて四日。よつやく辿り付いたのか、扉が開けられると眩いほどに光が差し込んで何も見えなくなった。

座りっぱなしで足元も覚束ない中、出ると無慈悲にも一言の命令に従いながら降りた時だった。

「玲！！」
「ぐはっ..」

横から掠め取るよつに、速すぎて何が激突してきたのか分からなかつた。

まあ声からして一哉君だろ。力を込めて抱きしめてくる辺り、やはりここは相変わらずの性格である。

「ぐ、苦じっ」
「あ、ごめん！……つと、無事そうだね」
「全然無事じゃない、吐きそ……う、っ」
「大丈夫？命の躍動、彼の者に『えよ ヒール

術の発動と共に、身体に光の粒子が溶け込み、一瞬で乗り物酔いが消える。

つこでにこうとこれまでの疲れも取れた感覚さえする。

「ありがとう。……そつか、治癒術習得したの」
「うん。光属性だから、丁度良かつたんだ」

「どうやら衣装チョンジしたらしく、あのヘンテ「な勇者っぽい服ではなく白を基調とした軍服のよつなものを着ていた。

アレは私も無いと思ってたから、今の服が凄くまともに見えた。久しぶりの幼馴染との再会を楽しんでいると、横からかなり恨めがましい視線が突き刺さってくる。

なんだと思っていると聖女様と猫耳少女がこちらをじっと見ていた。

「気軽に触らないで下さい」

「せうだにや、あんたはカズヤにふさわしくないのにや」

聖女様は相変わらずとして、なんだかこの猫耳少女はそのまま体言しているようである。

どうやら一ヶ月の間でまたしてもハーレムパーティーを……もうこの際どうだつて良いか。

「二人とも、いい加減にしてくれないか

「か、カズヤ様……？」

「どうしたにや？ あたし変な事言つたにや？」

「玲は俺の幼馴染だ。幼い頃からの友人に少しは敬意ぐらい払えよ

珍しいと思った。

滅多に怒らない一哉君が感情むき出しで言葉が少し荒っぽくなっている。

二人は一哉君に言われたのが相当ショックだったらしく固まってしまった。

つていうかさ、聖女様つて言われるぐらいなんだから少しぐらい嫌いな人間に対しても笑顔で厭味の一つぐらい言えるようにしたいた方が良いんじゃないの。

少なくとも一哉君は女嫌いも多少入ってるんだからそれを隠して上手くやつてると思うよ。

「ねえ聞いた？私がここにいる理由」

「玲が見つかって事しか聞いてない」

「あら？ そこの彼女は私を”勇者の義務を放棄した國家反逆者”として、友人まで巻き込んでここまで護送してくれたけれど、あなたには話を通してないのね」

「はあ！？ いつ放棄したんだ？ 大体、お前はレニアに突き落されてから行方不明扱いになつてたつてこりのに？」

一哉君の冷たい目で見られている聖女様は、面白くほんびんびくと震えながら目を合わせないようになっていた。

やつぱり言つてなかつたか。

こからからも冷たい目で見れば睨み返してくるのかと思つたら、しょらしく俯いた。

自業自得、やまあみるだの心で罵詈雑言を吐いていると、ミリアが眉を吊り上げ睨みながら一哉君の襟元をいきなり掴んだ。

「おこつー今の話、どうこう事だー！」

「どうこうつて？ この女は風の魔術を使つてまどりヴァイアサンの嵐の中、玲を海に突き落した」

気迫あるミコアの声に眉一つすら動かさず、彼は冷静にいなした。その言葉を聞いた途端、ミリアは一哉君から離れて聖女様へと飛び掛ろうとした。

周囲にいた衛兵が反応しても、既にミコアの手の届く範囲に聖女様はいる。

「ー」

か細い首にミリアの手が差し掛かるとした時、ぴたりと突然動きを止められた彼女は、誰が止めたのか分かると悔しげな視線を寄越した。

「ミリア、その方はヘーネ教団の聖女様よ」

「どうして止めるの、レイ！アンタを傷つけた人間だつていうのに……！」

「それでもよ」

聖女様は地面に座り込み、目からは涙がこぼれている。

正直言つてその姿を見ても許せる気がしない。

ミリアの気持ち、嬉しいけれど気持ちだけで押し留めて欲しかったかな。

「そつか、レイが嵐に巻き込まれたのはそういう事情があつたんだな。で、リヴィアイアサン倒したのってこの人への腹いせ？」

「心外ね。やるんだつたら本人にきつちり返すわよ」

「リヴィアイアサン倒してたんだ。一応でも勇者の仕事はしてた訳だ」

ああいうのが勇者の仕事なんだ……。

だつたら勇者いらなくね？ ああそりゃ魔王を倒せる力を持つ人間じゃないとダメなのか。

うーむ、だつたらわざわざ異世界召喚に踏み込まなくともこの世界から探すぐらいは出来たんじゃないのかね。

むしろ世界にいなかつたからわざわざ異世界にまで手を伸ばしたのが、伸びてしまったのか。

でも翻訳付きの指輪渡してたから前者だる、どうせ。

「カズヤ！ 酷いのにや！ そこまでレーニアに酷く当たらなくても

「「こつはそれだけの事をやつた。少しは血口を省みる事だ」

付いて来て、と歩き出した一哉君の後を追う前と、ミコアの拘束を解く。

聖女様は既に衛兵と猫耳少女に守られていたから、危害は加えないと思つが……少し心配で振り返ると案外ぴつたりと後ろに付いてきていた。

「じめん。少し血が上つてた」

「いいよ、ミコアの性格は知ってるから」

短気で仲間が馬鹿にされたらすぐに喧嘩吹っ掛けるのなんて、最初から知つてる。

色々な道に枝分かれしている城内を完全に覚えて歩くには相当な時間が掛かるだろうと予想できる。右へ行つたり左へ行つたり。

上の階へ行つたかと思えば下の階へ降りたり。

最初は一哉君が面白半分でわざと迷つた振りをしているのかと思つたが、どうやら彼自身も迷つていたらしく。

おいおい誰だよ、あんな自信たっぷりに付いて来いだなんて言つたの。

「まずい、このままでは夕飯に間に合わない……！」

「ちなみに夕飯は？」

「エビフライが食べたい」

「それ一哉君の希望じゃない」

「今日こそエビフライが出ると思つんだ」

お前は一体いつまでエビフライが出ることを望んでいるんだ。

結局四人仲良く、全く人が通らない古ぼけた通路を一哉君の言つた
飯の時刻以後も彷徨う事になつた。

「遅いっ！！」

「ちょっと寄り道しちゃつた」

「ちょっとどじこじやねえよバカつ！俺が一体どれだけこの時間を
楽しみにしていた事が……！」

苛立ちを隠さずテーブルに拳を叩きつけたその人物を見た時、初めて会つたような感じがしなかつた。

地団駄を踏む彼の事などお構いなしに一哉君は悠々と椅子へと座る。肘について、未だに顔を上げない銀髪の彼を見下ろすように眺めた。

「なんだよ、俺とそんなに飯食いたかったのか？」

「当たり前だろ？お前がいねえと飯食えなくしたのはどじこのどいつだよ！俺を飢え死にさせる氣かこの野郎！！」

ビシッときれいに腕をまっすぐに伸ばして一哉君を指した。

散々文句を言い終わつた後に流れた「ぐう」という音がなんだか場違いに聞こえるのが不思議である。

それは今まで食事が話題だつたからだろうか。

恥ずかしさで一気に勢いを失くした彼はそのまま着席した。

それが合図だつたかのように、彼の後ろにいた軍服の女性が私達にも着席を促した。

「あーなんか見苦しい所見せちまつたな」

「存在自体見苦しいから心配いらないよ」

「フオローか？喧嘩売つてんのか？」

「後者だね」

「よし、今からお前に出す料理を全部バイラの肉にしてやる
「IJの方はこの国で今一番国民に支持されている偉大な方で、そして次期魔王とも言われている方なんだ」

その素早い掌の返しよつには感心する。

そしてそれを聞いた次期魔王とやらはかなり満足げである。

……そんな簡単な褒め言葉でこの国は大丈夫なのか？

ちなみにバイラの肉とは、パサパサで引き締まりすぎて硬くて食べづらいと言われている。

そして言わずものがな魔物の肉である。

唯一魔物の中で食せる肉として有名だが、あくまで非常食という考えでしかない。

「で、そのお偉いさんと私達は一体どうこう見で夕食を「」一緒に頂いてるのでしょうか？」

「あれ、覚えてないの？」

『「こちらの方はエレヴァン皇国の皇子ですよ』

『あー……あの偉そうな感じの人？人違いじゃないの？』

先程までのやりとりを見ていると威厳に溢れていた第一印象とは全く違う印象を受ける所為でなのか、バカキャラに見えてくる。

「何だと？俺はお前の事を覚えているのにどうしてお前が俺を覚えていない！！」

「さあ？何分、どこかの誰かさんに嵐の中海に落とされたりと色々ありましてね」

「む……その件に関してはこちらに任せせておけ

「 わづですか」

まあどうだつて思こんだけど、たぶん「いやいや」と複雑な事情つて奴がからまつてくるんだわい。ね。

つていうか誰の仕業か分かつてゐるんだ。

「まあじまひくは勇者としての仕事もなここへつてこなかよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5799u/>

光と闇

2011年10月8日18時06分発行